

社殿の改修祭典の用意を爲し、何に不足無く経過したる也。神殿は絶えず破壊するものならず、神職その人足らずして、多くの神社を一人にて兼務す。然るに此不景氣甚だしき時に當り、基本財産、神社設備、神職増俸等を強ふるは心得難し。大枚の黄白を斯かる不急の備へに永く蓄積せしむるは、地方に融通すべき活金を埋め去るに等し。神社の基本金殖ゆとも、土地繁昌せずば何の効か有らん。況んや地方には、必ず多少の奸人ありて、百計して此基本金を濫用する者多きをや。一昨年有田郡山奥村の白山神社を、生石神社に合併し、社趾の立木を賣却して得たる二千五百五十圓の行方不明となり、加ふるに石段、燈籠、手水鉢等は、誰か々分捕り了れり。比較的正直なる警官に、合祀を司らしむべしと論ぜる人あり。以前は毎大字の神社參詣人に飲食賣り、祭典の旗幟を染めなどして、生活せし者多し。孰れも合祀の爲め失職難溢せり。又村民他大字の神社に詣づるに、衣服を新調し、甚だしきは宿料を要す。以前は祭禮に如何に多くの金錢を費すも、皆な自大字の収入と成りしも、今は全く他大字に落つ。故に參詣者日に減じ、金錢の融通利かず。今富田村の二社を、他村に合祀せしに、他村へ錢を落すを嫌ひ、村民社參せず、終には騒動を醸し、縣廳は己むを得ず復社を許せしに、各々其得意の手傳を爲し、僅々三時間にして全

く社殿を再建せり。三又とて紀州にて、三箇の極寒村の第一なる地あり、十人と集り顔見合はす事無しと云ふ。其處に日本に唯三ツ有りといふ星ノ社あり、祭日に近傍十餘里の人群集して賑ふ。其日の収入にて社殿を修覆し、貯蓄も成りし也。然るに村吏強制して、至難の山路四里を隔てたる地に合祀す。而して社費は舊に比して三四倍にも嵩みたれば、樵夫等その負擔に堪えず、公吏來たりて拂はずば社殿を焼き、昔明星が降り留まりし大杉を伐るべしとて、村民を脅したりと云ふ。凡そ神林の木は、もと材用の爲めに培養せられず、故に材としては、價格頗る低廉なり、神林悉くを伐るも規定の基本金は出來ず、神殿に小破損ある毎に、神林の木を伐りて其用を便せしものを、一度に伐り了りて市場に出すも一向に賣れず、空しく白蟻を肥して益無き所多し。金錢のみが財産に非ず、神林も社地も財産也。地震失火の際、神林に依て生命金錢を保安せる例多し。民の信念薄らぎ、恒心亡失せば、神社の基本金は積みて山を爲すとも、徒らに姦惡を助長するのみ。事の未たる金錢のみを標準として、千百年來信仰の中心たりし神社を滅却するは、地方衰微の基也。

第四、合祀は庶民の慰安を奪ひ、人情を薄くし風俗を紊す。

憲法己に信仰の自由を許し、由緒遙かに神道に劣れる天理教、金光教すら存立せしむ。神社の神は、多くは皇祖皇族、若くは其連枝末裔、若くは一國一地方に由緒を有し、功勞有りし人々也。民舉げて之を慕ひ之を敬するは、蓋し至當の美風也。床次(竹次郎)内務次官、先年歐米を視察し歸りて、諸國何れも古院禮拜堂多きを教化の根本と賞せり。吾國神社の教化、何ぞ彼等に劣らんや、唯彼方には堅固の用材多ければ、偉大耐久の寺院多く、吾邦には木造の建築を主とすれば、宏壯耐久の物少し、故に兩太神宮を始め、神社孰れも時を以て改造の制あり。前年米國の雜誌モニズムに寄書して、建築宏大に、國亡びて後迄も傳はる程の物なきは、眞の開化國ならずと説きし人あり、笑ふべき愚論也。埃及、巴比倫、空しく建築のみ残りて國亡びなんに、何事を誇り樂むべき。吾邦の神社建築は宏壯ならず耐久せざる代りに、多くは神林を具し、希代の老大樹又他に見る可からざる珍生物多し。是れ今の歐米に希に見る處、吾神社の短を補ふて餘り有り、外人が常に古書のみを讀みて、現今觀る能はざる風景雅致を、日本で目撃し得と嘆賞措かざる所あり。菊池幽芳氏が、歐洲の寺院は建築のみ宏壯にして樹木林泉の風致無く、心底から有難味を感發せしむるに足らずと云へるは至言也。獨逸のエー・フラン・ヤンソンが、伊勢の大廟に謁せる感

想の記に「若し周圍の森無くして斯かる建築を想像せば、誰か其神聖なるを想ふ者あらんや。實に此の如き古朴の神殿が神美化さるゝは、全く周圍の太古的森林に基く、是れ歐洲の建築と大に其趣を異にする處也。希臘の神殿又中世紀の殿堂は、常に獨立して周圍の天然と相關する處なし。然るに日本の古代の神靈なる建築は、常に四圍の天然と密接なる關係を有つ」云々と述べたりとか。去れば洋人は「テニソンの『ビ・ハインド・ゼ・ヴェール』の句などを、えらい事のやうに誇るも、其のやうな事は「越し方も、又行く先も神路山、峰の松風峰の松風」と、守武(荒木田)が三百年早く道破せずや。後年日本富まば、外國より用材を購ひ、如何なる大社殿をも建て得べし、千百年を経て成りし神林巨樹は、一たび伐らば忽ち再生せず、と熊澤(蕃山)が言ひし通り、神威爲に竭き果つべし。神社は建築よりも神林を重要とする由、三月十日の「扶桑」雜誌に白井博士の論あり。同十二日中村代議士の質問演説にも出でたり。然るに和歌山縣の如きは、神職の元締たる人が、完全なる神社は、正殿、神庫、幣殿、拜殿、着到殿、舞殿、神祭殿、御饗殿、御炊殿、盛殿、齋館、祓殿、祝祠屋、直殿、宿直所、厩屋、權殿、遙物所の十八建築を有するを要すとの謬説を吐き、神社係り吏又社内別嬪が水茶屋でも出さば宜からむと望むなど、言語道斷の徒輩のみなれば、合祀の結果二三千圓も

無理算段して、立派に成りしと云ふ社を見るに、神林の蒼鬱たる物も無ければ、古へを偲び、稜威を仰ぐてふ感念、毛頭起らず、ブリキ板の屋根、石油の燈明で俗化し盡し、古代の石燈籠、手水鉢は亡はれ、古名筆の繪馬は賣飛されて、代りに娼妓の石版畫を掲ぐ。外國人の目には、彼國公園内の雪隠ほどの詰らぬ建築故、自國で廣重の神社の繪を眺むるを宜しとし、二度と來たらず、事々物々西洋化し行く日本に、神社迄も合ノ子設備と化し行くは、月の洩るゝを賞翫せる不破の關屋を葺直したるより以上の拙策也。扱、合祀の爲め、十社二十社目白鳥が押合ふ如く詰込まれて、境内も狭くなり、有難さなし。小山健三氏は、日本人の最も快活なる一事は、休日、古社殿前に立て、精神を澄すに在りと云ひしとか。是れ合祀後の混成神社に望むべきに非ず。如何なる末技小道にも、言語で述べ盡し難き奥處有り、況んや國民化育の本たる宗教に於てをや。神社を潰して悦ぶ神官が、説教したりとも誰か之を聴くべき。明治三十年夏、ブルストル開催の大英科學獎勵會にて、人類學部長の演説に次で、予が讀みたる『日本齋忌論』にも述べしが如く、神道は種々の齋忌に據て立つ、言論もて説くべきに非ず。本居宣長氏の如きは、仁義忠孝などを事々しく論説せぬが、神道の特に尊き所と言へり。乃ち言語にて言ひ顯はし得ぬ冥々の裡に、吾が萬古不變の

國體を、一時に頭頂より趾端まで感じ、皇室は素より、凡民に至る迄、何れも日本國の神祇の御裔也てふ有難さを、『何事のおはしますかを知らず』に悟らしむ。説教講釋、理窟實驗を須たず、單に神社神林の存在許りが已に人心の感化に大功有る也。ダーウキンの輩、犬が風に動く傘を惧るる例など引きて、宗教は怖畏より生ずと説き、『神を怖れず働け』などを金言と心得たる宗徒の分際としては、尤もなる説也。但し如何なる禽獸も、親の親を慕念する例なれば、吾人の遠祖を崇拜する神道は、不可知的を怖るゝにより立てる諸宗教に比して、進化の度迥に高しと云ふべし。近頃まで外人が賞讃せしは、日本人に一種歐米人に見得ざる謙讓優雅の風ありと。是れ主として幼時より神を崇めし薰習に由る。八年前(明治三十七年)ヘンリー・ダイヤ「大日本」を著はし、歐米にて巡查が棒を振廻さねば静まらぬ群集も、日本では藁の七五三繩一條で制止し、之れを破り之れを犯す者なしと云へり。此の感化力強き七五三繩は、今や合祀の爲に神威を失ひつゝある也。

第五、合祀は愛郷心を損ず。

愛郷心は愛國心の根本也。英國學士會員パサー氏曰く、人民を土地に安住せし

むるには、其地の由緒來歴を知悉せしむるを要すと。氏は近々野外博物館を諸村に設けんと首唱す。名前は大層なれど、實は吾が神林ある神社の如きもの也。此人二十年許り前本邦に來たり、神林が土地の由緒と天然記念品を保存するに大功有るを感じ、予に語られし事あり。外國にて氣が付き創設せんとするものを、吾邦で滅却獎勵とは狂氣じみたる事也。我等が祖先に濟まぬのみならず、恥かしくて外人に面を合はす事も出来ぬ也。古來、神社は皆な土地と關係あり、合祀し畢れば便ち土地と關係無き無意味のものとなる。人民が參拜せぬも尤も也。紀州人は多く古來海外に出稼ぎを爲し、國元へ送金するに、必ず其一部を産土神に献ぜんことを托し、或は異郷珍奇の物を献じ、故郷を慕ふの意を表すなど、聞くも心の清淨（きよじゆん）しきを覺ゆる程なり。西牟婁郡朝來村には立派な古社三有りしを、五千圓の基本金もて脅し、悉く神林を伐採し、路傍に慰ふべき樹陰皆無となり、其神體を纒かに残れる最劣等の社に抛り込み、全村無神となり、祭祀も中止せる故、他地方に奉公等に出でたる子女輩、何の面白味も無しとて歸村せずと云ふ。芳養谷といふ長き谷も、樟樹を伐らんが爲めに、千年以上の古社を潰し、其の他一切合祀せし故、小民何の慰安もなく、諸國に流浪して郷里を念とせざる者多く、其地第一の豪農すら、人を備ふに

由無く困却せり。依て人氣直しに私かに諸社を再興中なるもあり。高瀬といふ所の神職は、曾て監守盜にて處刑されたる前科者也。然るに郡衙の覺え目出度、自分の社に他の諸社を合併し、復舊を防がんと社殿を焼き、又自大字の壯丁を備ひ、他大字の諸社殿を破壊せしめしに、到る處大破されたり。二三社は既に復舊せり。又自高郡大山神社は、國司奉幣の古社にて、徳川吉宗以來、幕府より普請を加へたり。然るに其氏子の一人、己が神職として勤むる、他大字の劣等の社を村社と指定し、村民が他の諸社を大山へ合祀せんとて作りし請願書を改變して、大山をも件の指定村社に合併せんとしたるを、由緒有るものなれば抗議出で、縣知事も其存立を許せるに、彼の神職役人を語らひ、此の社を存置せば、其社費と指定村社の社費と二重に負擔せざるべからずとて合祀を迫れり。縣郡の神社係りなど、至極の冗官にて、何の用事も無き故、斯かる不法を以て人民を苦しむ事のみ出精す。虐政の最も虐なるは、法に據りて虐を行ふにありと、モンテスキューは言へり。斯かる閑官虐吏の置かるゝを見て、地方行政の刷新は望むべからざる事と知るべし。又少々の俸給を得んとて、四百年來奉祀せる自分の氏神の社を潰さんとする神職は、利の爲めに自國をも賣るべし、愛國忠孝など説きたりとして、誰か傾聽する者あらむや。

第六、合祀は土地の治安と利益に大害有り。

子貢孔子に問ふ、殷の法に灰を街に棄てる者を刑れり、過酷ならずやと。孔子答て曰く、然らず、灰を街に棄つれば、風吹く毎に衣を汚し人憤る、自然と喧嘩多く大難を惹起す、一人を刑して萬人慎むと。歐米諸邦、巨多の金を費して公園を設くるも、民心を和げ世を安んぜんとして也。吾邦、從來大字毎に社寺有り、民の信念を高むると同時に、慰安悦樂を興へたる也。近年、村里の凋落甚だしく、百姓稼穡を勵まず、都市に流浪して惡事を爲す者多し。之を拯はんとて、弊害多き盆踊りをすら解禁せる府縣あり。扱、一方には清淨無垢の樂地たる神社を滅却せしめ、其跡に富人が別荘を立て、甚しきは娼家を建てなどするに、貧民の子供は神社に詣で神林に遊ぶを得ず。路傍に喧鬧して車馬に傷けられ、田畑に踏み込みて苗を損じ、延いて親同士の争鬪となり、埒もなき事件を生發するに至る、合祀を獎勵するは、故らに灰を街に撒きて、人民を争鬪せしむるに同じ。起世因本經に「有三十天、惟得眠見波婁沙迦園、身不能入、故不得彼處種々五欲功德、受具足樂、何以故、彼業勝故、以其前世善根微劣、不能得入、有三十天、得見波婁沙迦園、身亦能入、既得入已、具得彼處種々五欲和合功

徳、何以故、以其善根有別異故」。是れ取りも直さず、歐米の市街内の公園に鐵柵を廻らし、富人は鍵を持って自在に出入遊歩するに、貧民は柵外より望んで之を羨む光景也。從來、何人も往て遊び得たる神社の趾が、個人に獨占せられ、先祖が寄進せる石燈籠、樹木を分捕さるゝを見て、誰か之を悦ばん。貧人が富人を恨むに至るは悦ぶべき現象ならず、危險思想を虞るゝ事の甚だしき政府が、斯かる不公平を行ふは不合理にあらずや。又佐々木博士は、本邦毎大字の神林は、歐米の高塔と同じく、村落の目標となる大功ありと言へり。漁夫など山頂又神林の木を目標として航海し、難船又洪水に、神林目的に泳ぎ助かり、大水の後、神林を標準として境界を定むる例多し。攝津の三嶋郡及び泉州一圓に、合祀のため神林全滅し、砲兵の演習に標準を失ひ、兵士田畑又砂に露濱營する故、損害も多く、日射病患者も増加すと聞く。甚だしきは伐木のため飲料水濁り、又涸渴せる地もあり。又佐々木博士が論ぜし如く、今の如く神林伐盡されては、假令、合祀により多少田畑が廣がり、有税地増し、國産の收入に幾分の増加を見得たりとも、一方には鳥獸絶滅のため、害虫の繁殖非常にて、爲に要する驅虫費は田畑の收入を踰ゆること、幾倍なるを知らず。英國のバックランド氏の説に、虫類の數は、他の一切諸動物の總數より遙に多く、多くの虫類は一

日に自身重量の二倍の草木を食ふ。馬一匹が一日に一噸の枯草を食盡す割合也。之を防ぐは唯鳥類を保護繁殖せしむべきのみと言へり。昨年十一月の本誌に、白井博士、燕が白蟻を食ふ事を論じ、『神社に關係無きか』と言はれたるも、紀州にては燕は秋葉神の使と稱し之を殺さず、其大なる一種鬼燕と云ふは、主として神社に集ひ、人家に巢へば不吉とす。薄暮まで飛びて虫類を食ふこと夥し。予在歐の日、伊太利の貧民燕を釣り食用とし、爲めに佛國に來たる燕少く蚊多くなり、熱病を彌漫すとして、伊太利政府へ抗議せし事あり。又紀州の神林には、古來、蟻吸ひといふ鳥多く住したり。臺灣の綾鯉、南米の食蟻、獸の如く長舌に粘涎あり、白蟻、蟻等を不斷に呪ひ食ふ。一年に二十許り産卵し、繁殖力強き者なるも、近來、白蟻の勢力頓に盛んにして、和歌山城や紀三井寺の其害に遇ふに至れるは、神林の濫伐荐りなるより、斯かる有益鳥多く渡來せざるに因るかと思ふ。合祀が民利に大害ある事斯くの如し。

第七、合祀は勝景史蹟と古傳を湮滅す。

勝景史蹟保存の本邦に必要なものは、史蹟名勝天然物保存會が専ら唱道する所、今更予の細説を要せず、但し彼會より未だ十分に神社合祀反對の意を公けにせ

られざるは遺憾甚し。凡て例を紀州に採りて管見を述べんに、『松屋筆記』第五十二卷、徳川頼宣卿の事を叙して、『又た或時新田開發の場所を見立る事有り、和歌浦近邊、其外方々七八ヶ所繪圖致し、奉行其外役人頼宣君の御前へ持參致しけるを御覽被成、被仰けるは、我勝手の便に宜しとして、名有る地を埋め、名有る山掘崩し、田畠に致す間敷候、殊に二十一代集の歌に入り、名所に書載せたる名所舊跡をば、堅く綺ふ可らず。末代に至りて、紀伊大納言は新田を開き、利慾の爲に、歌の集に入り詩文に乗りたる名所舊跡を田畑と致したり、扱々愚蒙の人によりけるとして、末代に我を嘲り、恥を末世に残し、萬人の災に成らんこそ、掌を指すが如し、必ず名木を伐り名所を埋め、名所舊跡を新田に致すこと夢々不可然と、急度被仰付候、先年布引の松枯れし時、殊の外御憐み被成、様々の薬を被仰付、何卒枯ぬ様にと種々被仰付也。去るにより、度度役人被遣、御領國中の名所其御穿鑿有つて、舊跡の絶えぬ様に被成けり』と有り。されば現存和歌浦の設備も、此君の計畫に成りしを覽て、文筆有る者は武備ありと、貝原氏も稱讚せり。今の徳川頼倫侯が勝景保存に盡瘁さるゝは偶然ならざるを知るべし。然るに近時紀州の官公吏の無頓着なる、二十一代集の名所舊跡を滅却して悔いず。例せば萬葉集に名高き白崎如きドツの白堊崖に比すべき壯觀な

るを、全然爆裂破碎せしめ、同集に見えたる出立松原も、小學校建築用材と稱して、村民樹幹に抱付て哭くを、もぎ離して伐盡さしめ、炎天に蔭なく、魚類濱に近からざるに及び、大騒げるれども及はず。ドイツなどには、勝地の電線を地下に架せしめ居るに、近く電氣鐵道を和歌浦絶景の所に串かんとす。玉津島なる高野明神の神輿渡御の窟は、公任卿の歌等に名高きを、俗吏等一向に知らず、三十三間堂てふ淨瑠璃を述べたるなるをも察せず、速断して彼の窟を鹽釜大明神と改稱俗化せしむ。三年前出たるハツロク・エリスの説に、古希臘羅馬には、天然勝景と神祇とを連係する事厚かりしも、耶蘇都入りて偏執の極、古來の宗教を全滅せしめしより、天然風致を賞する事大いに衰ふ。其後古學復興するに及び、この趣味復起る由を記せるを見たり。吾邦民氣質涵養の要素たる文學が、勝景古跡と離るべからざる縁有るは知り切たる事にて、其の勝景古跡の多くは、神社と密切の關係あり。例せば、玉津島の如き、祭神名光浦靈にて、衣通姫を從祀せる由、神社録に見え、全く風景を神とし齋ける也。故グラント將軍來朝の折、東京無上の貧民窟と聞えたる鮫か橋の作人が、或は盆栽を弄し、或は團扇に俳句を書せるを見て、是れ世界中最も多幸福の民なりと羨まれしとか。扱、予屢々歐米の貧民窟に臨み、實驗せるに、彼方の下民に風雅など

云ふ事少しも無し。去れば其官民莫大の金を費し、説教所、公園、音樂亭、博物館等を置き、裸體畫像迄も縦覽せしめて、一刹那も多く、鬱陶を散じて惡念を長ぜざらしめんと盡力す。是れ臭素加里を以て殺人狂を療し、冷水浴して色情狂を制せんとする程、迂遠極まる方法乍ら、已むに優るの効は有らなむ。之と異りて吾邦民多くは、今も自ら風雅を尙ぶを知るは幸ひなれば、此傾向を可成永續せしめ度事也。理窟のみ教へ込みて、全然風流心を滅却せしめば、遂に露國の虛無黨が、詩は靴ほど人生に必須ならず、逆、良き靴工を沙翁ゲーテよりも、欽仰する如き氣風を生ずるに至らん。在來の神社は、多く大字中眺望最佳の地に在れば、宗教心と風流を養ふに一舉兩得也。滅却し去るべからず。序でに云ふ。近時神社は歐米の公園に匹敵すべきもの也と聞き、神林を濫伐し、社後の山を開き、遊宴姪蕩の地と化し去る風盛んなり。こは歐米にも天然風景の公園を最も貴ぶを知らず、公園とは必ず淺草公園の如き雜鬧群集するものと心得違ひたるに出づ。神社を見下して放尿し唾吐くなど瀆威甚し、最も戒飭を要す。

八年前の大英科學獎勵會に、地理學部長フレッシュキールド氏、世界の大局に威力を伸せる國民、孰れも山を神の住處として奉崇せりとして、希臘猶太を例證し、最

後に日本人の特質と山嶽に攀ぢ詣でて風に依りて、多く助長されたりと説けり。予は邦人が無闇に山に登りたりとて腹減るのみ、必ずしも國威を揚げむと思ふもの、登山は大に健康の便りとなり、氣宇闊達、精神壯快ならしむるを疑はず。瑞西蘇格蘭など、山高くして人勇也。然るに合祀の令出るや、神職輩無性を構へ、山頂在來の古社を平地へ合祀する事夥しく、登山者跡を絶つに及べる所多し。爰に掲ぐる寫真中ロハは(寫真略)西牟婁郡龍神山とて、上り路三十町有り、世間に多からぬ神にて、日本書紀等に出たれば尤も尊敬すべし。祠邊に神池有り、清泉湧出す、其邊に稀有の草木多く、眺望絶佳にして、山川港灣河溝丘岬等、一切の地理を實示するに適せり。年に二回の祭禮に、遠近の人晝夜陸續して參拜し、小店多く出で、村民と近町の人の利と成る故、祭日前に村民總出にて道路を修め、山林を整へし也。然るに此社を無理に山下へ合併せるより、隣村民林木を争ふ事輟まず、名木の櫻林伐盡され、土砂崩壞して小河を埋め、年々洪水出づ。此の小山の一方に杉を植ゑて崩壞を防いで一方には亂伐絶えず、状態次第の自治實に政道上の大矛盾也。三年前、予此山腹にて白前枚すだめのかこけの草黄花あるを見出し、牧野富太郎氏に贈りしに、珍種とのことにて、更に標品を求めらる。因て次年往き見るに、土砂崩壞の爲め絶滅したり。此合祠

に依て獲る所としては、神職爲に聊か増俸され、從來牛肉食ひし事無きが、今は食ひ得とし大悦する有るのみ。

同圖イ(圖略)は糸田大字の猿神祠にて、空海が創立せる高山寺(中山曰。南方翁の墓は、此寺の境内に在る)てふ大刹の側面に在り。其野林寺林と並んで絶景の地なりしを(ハ)なる稻荷社に合祀し、明治八年頃合祀せしも復舊せる故、今度は必ず神が還り得ぬ様にと、跡木一切伐盡さしめ、且つ石段を滅壞し、石燈籠等を棄てしむ。因て回教婦女の××同様、全く無毛となり、風景甚だ損ぜられ、土壌崩壞して、山邊無類の清淨井水を濁し、夏日無頼漢上り集りて、村中娘共の行水を眺め、迷惑一方ならず。因て交通を遮斷し、全くの荒地と成り了れり。此神社の傍なる大木のタブの木に、年々三十程計りの粘菌を生じ、其一は世界に此處のみ生ぜし珍種也。粘菌は原形質非常に大きく發生すれば、生死蕃殖、間種等學術上の大問題を研究するに足る。かゝる研究には幾多の歲月を要し、漸く成るものにて、日光の徹る時間短かく、萬事の便宜乏しき山間にては行ひ得ず、平地にて便宜多き神林あつて始めて行ひ得るなり。其タブの木圖の如く伐株のみ留むるに至りしは、残念至極と昨年版のリスター女史の大英博物館粘菌圖譜に記されたり。又此の神林に松葉蘭多かりき。

此物の發生經過は、學者今に明らかめ得ず。然るに予其一本生のものを見出し、平瀬作五郎氏に通知し、俱に其攻究に銳意する内、濫伐の爲め手懸りを失ひ畢りぬ。

久米(邦武)博士の説に、吉野朝以前本邦の土地は多く寺社の領分たり。従つて著名の豪族皆寺社領より起れり。近江の佐々木社より佐々木氏、宇佐香椎社頭より大友氏出たる如しと云へり。

今無闇に神社を合併して其の跡を滅却し、又神教興隆の爲とて、本來世襲の神職を罷め、他方の官吏上りなどを之に換へ、多數の神社を兼務せしむより、古蹟亡失、古文書什寶、精査を経ぬ内に散佚する例頗る多く、吾邦が古いと云ふのみ、古い證據が陸續失せ去る、和歌山縣誌編纂主任内村義城氏は、此頃の様なる合祀がつゞけば、到底確實なる縣誌、郷土誌は成らぬ筈と、新聞紙上に公言せられたり。一方に縣誌、神社誌を編ませ乍ら、一方に神社を合併するは、酒を醸しなから、鹽を投込む如く、小兒だにも成さざる愚案也。吉田重然が、故らに古器を損じ、扱糺合せて雅趣を増すとて、持囃せしを見て、大河内休心が、千萬に一を存する古器は、必ず冥護に由る。之を損じて悦ぶ重然は、天理に背けり、必ず殃に逢ひて亡びんと言ひしに、果して然りとか。千百年存立し來りし古社を滅却せしむるは、其罪重然に千倍すると云はん。

現に大塔宮高野落の御遺跡日高郡に多かりしも、合祀の爲め悉く其傳を失ひたり。史蹟といふは、高名の人や、大合戦の蹟、又有名なる詩歌に著はれた場所のみ保存すべき様考へる人多きも、實は然らず。近時歐米に民俗學勃興し、政府も人民も熱心に之れに従事し、英國にては、昨年の政治初めに、斯學の大家ゴム氏に授爵せり。譬へば、吾人文字を知りて後の事は、日記書簡等に據りて考察し得べきも、文字を知らず、記憶確ならざりし幼年の事は、里閭の傳説や、幼時の玩具や、參詣場を觀察して明らかめ得るが如き、史書に洩れたる事を、史書以外に考覈するが民俗學の務め也。六國史は帝室の記録故、帝室に關する事のみ詳しくて、下民一般の事歴は略せり。之を明らかむは、地方の風俗、習慣、童謠、俚話、兒戲、隱語、殊には神社の古建築、古器物、古式舊規等、今に残れるを見て甫めて爲すを得べし。爰に掲ぐる寫真圖(略)日高郡産湯大字の八幡宮畔に、産湯の井と云ふのがあり、應神帝降誕の節、此井水を沸して洗ひ進らせりと傳ふ、此時用ひたる火を、後世まで傳へて消さず、天保頃まで村民皆な此火を分ち用ゐし也。彼天皇の遺蹟たる上に、古へ本邦人が特に火を重んぜるを知るに足れり。(ローマのヴェヌスタレスが神火を守り、支那の祝融を火正黎と云ひしなど參照すべし)井邊の異樹は、本島にて此地のみ生ずる榕樹なり、多くの枝地に下

り入りて支柱となる。此の八幡社も、例の一村一社制にて合併せらる可き所を、村の小學校長と、寺の和尚と、村長の不埒を憤り、百八十人を集めて郡衙に嗷訴し、巨魁八人收監されしが、言譯立派に立ち、無罪放免、其の社は現存せり。其隣村に衣奈八幡有り。應神帝の胞衣を埋めたりと傳へ、大社にて、直立の石段百二段、近村の寺塔より遙かに高し、社前三町許り、全山樹を以て覆はれ、稜威儼然たりしを、例の基本財産作るとて、冬、青林の大部分伐倒し、其の樹を神池に浸して麴を製したり。八幡は軍神故、日清日露戰爭中は、庶民哀號して助力を祈り、戦ひ濟みて、無能我利の神主は叙勳さるゝに引換へ、神林を荒し、神威を汚し、多くの神社は驅除廢滅せらる。昔、寛平帝卒かに遊獵有らんとせし時、菅公「今年鹿何の罪かおはす」と問ひ奉りけるに、遊獵やめられしとか。知らず、近年神何の罪ありて、悉くかゝる無禮詬辱を受玉ふか、不思議といふも愚かなり。又其邊に三尾川といふ地、舊家十三四有り。每家自家の祖神の古社と神林あり、祖先尊崇の古風を存せるは賞すべし、然るに數百年の老樟を切盡さんとて、強ひて十三、四社を一所に集合せしめ、次に又他大字の社に合祀せしむ。アフリカの黒人が、一たび鹵掠され、二たび賣飛ばさるゝ如く、無殘酷だし。和歌山市近き岩樹村に、古來南龍公が高價の茶壺を埋めたりと云ふ童謠存せり。

予是は必ず上古の遺物を瘞めたるならんと考へ、徳川頼倫公に話せし事あり。近頃公之を大野雲外氏に話し、同氏往いて發掘し、夥しき上古貴重の遺物を發見せり。ゴム氏の説に、英國リップル河邊の民、古より一岳に登り、其谷を見れば、英國第一の寶を得べしと傳ふるを、啞とのみ思ひ過ぎたるに、七十二年前果して其處よりアルフレット王の古銀貨七千枚、外に夥しき寶物を掘出せりと。前述紀州の瀧尻王子社にも、某の木の芽の方角に金を埋めたりといふた歌有り、數年前其處を考へ、大いなる金塊を掘出し、之を懷中して逃亡せる者有り。かゝる古傳説は、神社と其の近邊に最も多し。素人には知れぬ事ながら、土中より炭一片を得るも、考古學上の大發見の端を之に發し、稍々貴重の研究を完成し得る事多し、然るに無知私慾の姦民共、非似神主の腹を肥さん爲め、神林は伐られ、社頭は勝手に堀らるゝより、國寶とも成るべき珍品貴什が絶えず失なはれ、適々其心得有る人の手に落つるも、出所不明隨つて學術上何の効果なし。大和には合祀の爲め、武内宿禰の墓らしきものが畑となり、大阪府には、敏達帝の行宮跡が潰されたと聞く。かゝる趾より米の三四俵取れたりとて、何の益ぞ。見世物にしても、それ位の益はあるべし。況んや合祀を最も勵行せし平田前内相が尊奉せし「しみたれ」宗の開祖は、田畠を廣く龜に耕すよ

りは、少なき地面を念入れて耕せと誨へしをや。備前邑久郡飯盛神社は、舊藩主の崇教厚かりし大社也。大いなる塚を祀る、平經盛の墓といふ。此人敦盛の父とて名高きばかり、さしたる偉人にあらず。然るに其の塚異様にて、中央に頭領、周圍に家來を埋めたる證有り。其邊上古の石器を出し、又軍神の話を傳ふれば、必定經盛の墓ならず。本邦上古の墳墓の制を調ぶるに、大必要の物也。是も例の合祀にて荒廢に垂んとす。去年國寶と成りし石川年足朝臣の墓誌も、此人何たる殊功特行ありしと聞かざれど、千年以上の世態を見るに必要の物也。されば主の名は知れずとも、古を察するに足るものは皆保存すべし。即ち今日暴かに分明ならずとも、漸時新發見の端緒を得べき也。去年一月傳承する所に據れば、皇族二千餘方の内、唯四百九十方のみ御墓の存在知れ居る由、然るに大西源二氏の來示には、只今世に知れて居る皇族の御墓は、鑑査を誤りたるもの少なからずと也。

又十六年前、現に大英人類學會長たるチャールズ・ヘルキュルス・リード氏、徳川頼倫侯を、學士會員俱樂部に饗せし時、鎌田榮吉氏と予と陪し往き、先方よりは、元造幣局備となりて來朝し、今は學士會員たるガウランド氏接待せり。此人シーボルト男と科學的に吾邦の古物を調査し初めたる事あり。其時予に話されしは、日本

には薄弱なる文筆上の調査のみにて、諸帝の御陵を定め、其餘をば一向構はず、是れ大なる間違にて、實は只今御陵と定まらぬもの、中に、甚だ立派なる御陵らしきもの多しと也。又今一つ吾邦考古の學にとりて大必要の事を聞しが、現時の無殘滅法の官公吏に話すは、姦惡を獎勵するに外ならねば、遺憾ながら口を緘る也。とにかく墳墓の定まらぬ皇族方の多きに、之と最も關係深き古社、神林を掃蕩するは、皇族方を厄介視せる致方、甚だ心外のことなり。

神社会併の爲に全滅せる史跡勝景、現に田畑荒地と成り畢れるもの頗る多く、孰れも、従前の痕跡だも留めざれば、後世誰が其慘禍の酷かりし事を知らん。因つて幸に予輩の抗議に依り、纔かに合祀を延期し居るもの、寫眞圖を出し、既に行はれ、又行はれつゝある合祀の何程無法なるかを證示すべし。第三圖(圖略)は西牟婁郡八山王子^{やま}とて、歷代熊野行幸に縁厚きは、其側に、今も車坂とて毎度の行幸における鳳輦經過の古道の存せることのみにて、知るべし。西行の「山家集」に、熊野に參りけるに、八上の王子の花面白かりければ、社に書付ける。

待來つる八上の櫻咲にけり

荒く下すな三栖の山風

とある其の櫻は今仍存す。境内柯樹密生して晝猶闇く、予平田前内相に呈せんとて撮影に往きしに、光線透らず、不得止社殿の後より其の一部を寫せり。伊藤篤太郎氏の説に、柯樹林は本邦と支那のみの特有なれば、何卒留保したしと云ふ。此邊の神林孰れも柯樹多く、柯樹は大木身なる故、櫓楫を製し、皮は染料とすれど、神林の産は其質下劣なれば、唯だ伐りて、××部落の焚料のみに用ゐらる、惜しむべきの至りならずや。件の神林にカラタチバナの自生有り。橘春暉の「北窓瑣談」に、此矮木、寛政七八年頃大いに賞翫され、一本の價千金に及べる有り、蘭牡丹の名花從來百金に及ぶもの有れど、之を踰えし例を聞かずと云へり。昔の書に、美濃より出し由見ゆ。去れど今日予が知る處によれば、本嶋にて、紀州那智山と、富田川筋の神林のみに有しが、他處には絶滅して八上社林にばかり存するが如し。八上を距る事遠からず、柳田國男氏の「石神問答」に本邦特有の風景と云へる田中神社あり、眺望の美なるは第四圖を見て知るべし、圖略又平重盛が父の不道を憂ひ死を祈りして、ふ岩田王子社あり。是等の古社七つばかりを、例の一村一社の制に基き、村役場の眞向ひなる小祠、以前は炭焼男の庭中の鎮守祠たりしを、其男の姓を取りて、松本神社と名づけたるに合併し、諸社蹟の柯樹林を伐盡さんと、村長村吏等に計畫せり。岡の

大字七十八戸許りの内、村長の縁者二戸の外、悉く不同意なるに關せず、基本金五百圓より漸次値上して、二千五百圓まで積上たるを役場にて障へ止め、其筋に告げず、五千圓まで値上して、無理無體に合祀を請願せしめたり。然るにかゝる名蹟の一舉に滅却濫伐さるゝを非難する聲高く、今日まで合祀を延引し居るも、役場が合祀取消書を取次がざる故、何時滅却さるゝも知れず。當時予自ら往て松本神社を寫眞し、役場員が愴然凝視せる邊に立ちて測定せしに、僅かに、長さ三十二步、幅二十六步ばかりの小境内地也。其處へ酒屋の納屋の如き建物を移し來たり、他の神社八座を、蜂の子の如く押込み、八社の後の林木をも伐盡さんとせし也。

此村長は再度まで模範村長として推獎されたり、此人お上を欺くに妙を得て、先づ其町の小學校へ校醫及び裁縫教師若干名を置きたりと報告すれども、其本人等に逢ひて聞けば、夢にも任命されし事無しと答ふ。又村の實況を書き上げよと託されし教員が、其一部落に博徒多數ありと直筆せしかば、忽ち放逐し、前内閣の御用新聞すら、嘗て模範村長などが、鼻糞金三四十圓頂戴せん爲に、書上げを美にする弊を命ぜり。

則天武后纂立して祥瑞を好みける時、倭人石を剖き、中赤きを見て之を獻じ、此石

有赤心と奏せしに賞賜厚し。直言者有り、寔に此石のみ赤心有て、他の無數の石悉く不忠ならんやと言ひしに、武后大に羞しと云ふ。所謂模範公吏のみが精忠にて、他は悉く不忠にも非ざるべく、又今の如き模範公吏が輩出しては、一向其の價値なし。唐の楊城、道州刺史、治民如治家、自書其考曰、撫字心勞、催科政拙、考下ノ下と、外聞と實際と大違ひ、古今一徹也。現内閣の首相も至て通人と承るに、野暮連多き前内閣に依様し、無闇と大安賣りに、模範々々と推奨させ、どうせ人民の負擔たる賞金を授くるは、無粹の至り也。公吏其の職務を果すに何の模範か之れ有らん。「苦勞させますしもするからに、恩に着もせず、着せもせず」。古希臘オリムピア競戯の勝者を賞するに、有價品を持つてせしに、弊害絶えず、遂にデルプヒの神話に隨ひ、無價品、即ちヘラクレスが手植の洋欖の葉冠を與ふる恒例と成りぬ。予は首相が此例に倣ひて粹道を發揮し、模範諸輩に鼻糞金賞賜の制を罷め、首相手植の美人の口から、彌々しつかりしるとて、ふんどしの一筋も下されん事を望む。

凡そ當今地方の濫政、合祀の一事に止らず、模範村長が賞金を受ると同時に、七十に餘れる老爺、戦争で子を喪ひ、六七才の孫を力に生き延びたるが、納税遅延のため、家を公賣せられ、心當ても無く流離するなど、酸鼻に堪えざる事多く、都會にて思ひ

到らざる處なり。されば、應仁記に、華洛の荒廢を悲んで、飯尾等が、

「汝や知る、都は野邊の夕雲雀、揚るを見ても、落る涙は」とあるを、焼き直し、

南方入道一首を思ひ續ける、

「汝や知る、田舎は海の潜水器、下るに付て上る吐息は」

出立王子は、後鳥羽上皇熊野行幸記に、建仁元年十月十二日、先陣參、出立王子於此點御鹽垢離、御所有御襖云々。今も濱邊に鹽垢離岩有り、五年前東京大學にて瀧尻懷紙叢覽の際、三浦周行講師が奏聞せる如く、此上皇御讓位後廿四年、京都より往復約十七八日を費やし、年一回宛熊野へ行幸有り、道中諸王子の社にても祈願有り、或は御歌會に託して、討幕の密謀を凝させ給へるが、殊に此處にて、萬乗の尊體に潮をあび祈禱し玉ひし也。然るを無理に合祀し去り、社殿破損、穢き衣服を乾させ、惡童日に此處に集まり、下なる民家へ放尿し、婦女の行水を眺め、四隣迷惑甚だし。之れを潰して何の益なく、唯岳上の小學校への通路を不恰好に擴げたるのみ。聞けば、前年全國の小學校へ、後鳥羽帝の尊影を官より配付せりと、此寫眞を中村代議士、平田前内相に示し、帝御存命中は、事遂ずして遠島に行幸あり、身後又かゝる非禮を受けさせ玉ふは、何たる事ぞと書きたりとか。扱近傍の民は今も帝德を慕ふの餘り、

神社なしに祭禮を舉行す、鹽尻に秀忠公神社は民親しむに非れば、荒廢すと謂へり
と見ゆ。是れはそれに反し、亂暴にも先皇の御遺跡を滅盡せるに、民衆の追懷少し
も寢まざる、恰かも亡國の觀を爲す、之を觀る者誰か慘傷を催さざらん、かくの如く
合祀は、勝景と古傳を湮滅す。

(附言)明治の初年、四條隆平奈良縣に知事たり、舊物打破に急なりし餘り、今日政府
が尠からぬ保護費を給し居る興福寺の五重の塔を僅か三十五圓に賣飛ばさんと
し、春日神社境内に豚を飼はしめ、猿澤池の鯉を公賣漁獲せしめたりと云ふ。頃日
三教合同の催し有りしに反し、其頃佛教を排し、兩部神道を抑ふる事甚だしく、熊野
湯峰の鳥羽帝の寶塔迄も破却し、那智の觀音像を縛りて下馬橋畔に野曝しにした。
予が現住地田邊の鬮鷄權現の神寶など一切燒失されたり。既に此悔あるに、今日
又合祀を強ひ基本金を作る爲めと稱して、後世獲易からざるべき物件を賣らしむ
るは、過ちを再びする者也。一例を舉げんに田邊に近き稻成村の例祭に催し來れ
る獅子舞は無用なりとて、寶永中に作りし大獅子頭、今日修補すら出來ざる精巧の
名作品を、其社の基本金を作る爲めとて賣拂ひ、之を買ひし者其一對を九十錢に轉
賣して、利益多しと悦び居たり。予が、南ケンシングトン美術館の技手たりし眼よ

り見れば、少くも三十圓の値ある物なりし。斯かる什寶や神林神田を賣らせて迄
も、基本金を積ませ、大悅する政府は、放蕩息子に田畑を賣らせ、汝は所欲自在に叶ふ
べき金錢を獲たりと賞讃するに等し。又只今東京邊で考古考古と云ひ、京傳や種
彦が考へた物をひねくり、得色ある人多し。隅田川の梅若塚は、徳川中世の石出帶
刀が築きし處、其神像は大工棟梁溝口九兵衛之を彫る。鳴立庵は大淀三子風より
名高くなり、大磯の虎の像は、元祿年中吉原の遊人、入性軒自得の作とぞ、こんな比較
的新しき物すら、それぞれ古雅優美なる點もありて、馬琴、京傳輩の追考により、立派
に考古學の材料たり。然るに西澤一鳳が論ぜるが如く、東國の事物は其源晚く、京
畿關西にはより古き物、數に於ても質に於ても、迥かに東國に優れるに、今迄穿鑿の
足らざりし儘に、彼を重んじ是を輕んずるは慨すべし。一見して何の事無き小祠、
狛犬、扁額、繪馬などにも、古の世態を察し巧藝を觀るべき物多きを、無學破廉恥、何の
益なき俗神職の俸給を増し、差迫りたる必要な基本金を作る爲めに、専門家の審
査も俟たず、或は賣失ひ或は故らに合祀の爲め、流し燒き了れるは極めて心無き業
也。

チンベルグが日本へ來りし紀行に、當時、御宇天皇の御名を凡民何れも知らず、之

を聞出すに頗る苦める由言へり。それより前にも、清少納言、紫式部、周防内侍など、孰れも綽號の如きもので、本名を當時の書物にも記さず。今日も婦女が男に本名を知らるれば、必ず其妻たらざる可からざる風俗あり。又實名を知らば、其人を咒縛驅使、自在に生死せしめ得と信ずる種族あり。本邦にも昔は、貴族のみか、土豪會長の名さへ、下民に知れざりし事多く、自然に其名を失ひ傳を忘れ、或は傳のみ残りて名を失ひし後、著名の神祇を其跡へ勸請せるより、書籍と口碑神傳區々たるに及びしならん。例せば日高郡大山神社は、記録には大山祇命を祀るといふに、俚傳には其神昔牛形を現じ夜遊ぶと云ひ、支那に上古の名臣夔應龍等を動物形に畫きし者あるが如く、彼社もと牛を名とし夜遊を好みし人を祀れるが、後に大山祇を迎へ祀りしか、史書に粟嶋明神は少彥名命也と云へるに、土俗此神は女神にて、銑漿と出産を掌ると信ずるが如し。又佛人ムラの「東埔塞己國誌」卷二に、千八百五十二年アンドン王令して、官人は彫印、庶民は指判を借用證文に押さしむ、此國の人由來氏無く、名も大抵相同じきより、裁判甚だ難澁せしが、指判法普く行れて大に其勞を省くに及べりと見ゆ。吾邦の古へ亦氏を稱せざりし故、彼我相混じて、同名の神に異傳多きなるべし、日本紀すでに同神異傳多き事、希臘の諸神、鎮座の地に隨て傳話異なる

が如し、後世同じく清和源氏のうちに、九郎判官義經と山本九郎義經と混じ易く、史記に越王勾踐と荆軻傳の魯人勾踐と有るが如し。故に只今地方に同名諸神の異傳多きを、學者その記傳に違へりとして、一齊に虚談とするは、反つて實情に遠ざかる。四年前に出たるゴムの「歴史科學としての民俗學」に、古話俚傳十の八九は有史書前の史實也と主張せるは、道理ある言たり。

前文述べたる如く、上古の事は、帝室の舊記の外に書物無ければ、下々の事知れ難し。但し八百萬神の内には、吾輩下民の祖神も無論含まれ、其履歴も古話俚傳等に依て、古神社に附屬し居れり。アビニシヤ人は、日本皇室より其國民の系統遙かに古しと自慢し、ロシア人は、其國に隸屬の諸王室世界中最も古き者のみを聚めたりと自負す。然し乍ら、吾邦の皇室權貴のみかは、下民非人の末迄も、皆な神祇の裔にして、其神祇それ、其社有り、其傳説有るに比すべうも有らず。然るに世に最も成行き不定なる金錢の多寡を標準として、舊社古神林を斷絶せしむるは、遠き慮りなきに過たり。印度のシャイニズムは、偽經に屢々見えたる尼韃子、露身外道ならんと云ふ。故モニエル・ウキリヤムは、釋迦の大敵なりし調達も、此教徒たりしならんと云へり。大鳥圭介男、音の近きより之を禪宗と譯せるを、予不當也と論ぜしに、

土宜法龍僧正聞きて、シヤイニズムの祖を大雄マハブエラと呼び、鐵鉢の代りに木鉢を用うる等、禪宗の要素之より出たるらしき事多しと也。此宗徒今も印度に榮え、各自塔寺を建るを勵んで、他人が立ちたる塔寺の頽廢を顧みず、爲に市街塔寺重疊、新舊混亂、塵塚の如く、自家の功德のみ計りて、其他を破滅に任ず、そんな根性故、金錢を多く持てるのみにて、千古獨立建國せし事なく、何たる歴史をも有せずと聞く。吾邦も昨今の如く、金錢次第で淫祠俗祠を盛典せしめ、一方には、一國一地方に由緒久しき古社舊林を全滅せしめては、我利のみ増長して、他人を顧みざるジヤイニズム同様の民を養成する次第と危み憂ふ。一昨年十月十五日の大阪毎日新聞に、大垣公園に腹白き老狐出で、兒童に苦しめらるゝを、佐久間某救ひ助け、柵もて圍ひ餌を與へ、百餘圓の經費にて稻荷大明神と崇め奉れりといふ電報を載せ、古社滅却の模範たる和歌山縣廳の御膝下で、數月前、達磨稻荷てふ俗祠を盛大に建立せしめたり。田邊近在其他に、年々某大社より狐靈を譲り受け、非理の福を祈るとして、自宅の庭に小祠を建る者著しく増加す。譬へば、物を賣る時は狐靈秤の盤に座し、物を買ふ時は鍾に着きて重量増減し、以て家主を利すなど信ず。かゝる行ひは、自稱一等國民の面瀆し也。是れを以て予は、政府が在來の神社を合祀濫滅せんよりは、嚴重に新神社

の創立を取締られん事を望む。「駿河土産」に「大小に寄らず、寺社等を新たに建立など有る義は、先以て無益の事たるべし」と、將軍(秀忠)へ申述し、年寄共へも態々申聞かせ候様にと「家康上意被遊と也」。此家康は「善惡によらず、五十年來仕來りし事は、大方改めぬがよし」と云ひし由。「戰國策」の甘龍の語に、聖人は民を易へずして教へ、智者は俗を變せずして治むと云ひ、又古法に因て治むれば、吏習ひて民之に安んずと云へるに同じ。又序でに云ふ、近頃、伯耆の米子で、某貴族の記念公園とかを造るとして、朝鮮征伐の時、清正を捨殺す可らず、糧盡きなば砂を食はん」と氣焰を吐きし加藤光恭の墓を移すとて、一つの棺を海中に沈めたりとか。英國ケンシントン宮入口の通路に、ナイル河源發見者スピーク變死の際、諸友醜金して建たる碑の現存すると對照すべし(未完)

以上で雜誌掲載の分は打切られて居る。勿論、完結でない事は、末尾に「未完」とあるのでも知られるが、其後續刊の誌上には翁の他の記事が有つて、此の記事の續稿は見當らぬ。心當りの一二を詮索し、更に帝國圖書館本に就き確めたが、是又此の處で終つて居る。察するに餘り長文なので、編輯者が途中で打切つたものと思ふ。然し未完でこそあれ翁の言はんと欲した處は、殆んど盡きて居ると信じ、敢て轉載する事とした(中山追記)。

自殺に就て

南方熊楠

大正元年九月十三日、明治天皇御葬儀の夜、乃木希典將軍夫妻は、大君の御後を慕ひまつりて殉死を遂げた。そして此の事が世に傳はるや、將軍の死を以て、言説を超越せる忠誠の美事となす者、是れに反して自殺は罪惡なりと非難する者、世論極めて置々たるものがあつた。就中、谷本富博士は、乃木將軍は衝氣満々たる者、従つて將軍の死は衝氣に出でしものに過ぎず、且つ骨相上より將軍を批評し、最後に將軍の名を聞くも厭な思ひがするとまで漫罵を加へた。是れに次で浮田和民博士は、將軍の自殺は歐洲人により、國民として人間の價値を輕んずるものなりと解せられ且つ將軍の死は餘りにも悲劇過ぎて、摸倣すべからざる行爲なれば、日常の國民道徳に左迄の効果あるまじとて不可となせり。此の處論に接したる南方翁は、直ちに筆を呵し、角屋編蝠の變名を以て、兩博士に左の如き痛棒を加へた。三十餘年後の今に讀誦するも、實に會心の大文字である(中山太郎記)。

「日本及日本人」十月(大正元年)一月號「嗚呼乃木將軍」第一頁に「元と天主教は、何故に堅く自盡を禁ぜしか云々。事情は種々なれど、中にも現世の劣り、天國の優るを説き、聽く者の早く天國に到らんとするを防ぐの必要あり、將た初め信徒の貧賤より

出て、強者に反抗するを難じ、恰も耶蘇の甘んじて刑に就きし如く、甘んじて刑に就けよと教へざるを得ざりし也」と有るは、予の如き寡聞の者に、最も耳新しく、能く當時の事情を穿てる話と思はる。其頃、彼教を信奉せし婦女を誅するに、多くは先づ無賴下劣の民を放ちて、之を強辱せしめ、扱、之を殺したるに、何れも甘んじて強辱を受けたる後、死刑に就けり(六行中略)。今貴話を讀み、甫めて彼殉教輩多くは下賤の女性共故、自ら引決するの勇氣を缺きたるに由ると知れり。扱、ヤソ教とても全然自殺を非難するに非ざるは、ソフロニアの例にて知るべし。此女、羅馬の判官(プレトル)の妻、斯教を奉ずる事、最も厚く、美人の譽れ高かりしを、淫虐なる皇帝マキセンチウスに召されけるに、其夫至極のへげたれにて、輒く命に應じぬ。妻免がれざるを自覺し、化粧の時間を請ひ、刺腹して死したるを、決疑論家或は正當、或は不正當として、今に決し得ざる由也。吾邦にも將軍足利義教が、若狭の守護職一色義貫の夫人を強奪せんとし、夫人の輿中に自刃せしより事起りて、義貫を誅し。又秀吉公肥前の波多野三河守の妻を召しけるに、同様の事ありて、其領地を奪はれし由。細川忠興の妻に對しても、秀吉濫がましき事ありけるに、其の懷劍を用意せるより其事止みしも、常山紀談に見えたり。自分の命を捨るのみか、夫に迄も禍を及ばせしは

遺憾の至りながら、他に遁がれやうなき時は、自殺の外無かるべし。之を塵塚物語に見えたる師直の臣下輩、又西史に載せたる羅馬のオクタギウス帝の官従共が、妻を主人の祕室に召さるゝを黙從して看過し、武田元次の妻京極氏が、夫の殺されながら、甘んじて其仇の妾となりて榮華に傲りしに比ぶれば、品性徳行の差違霄壤も嘗ならざるを見ん。されば三都勇劍傳に船越氏の妻が、夫の不在中に上官に汚辱されて、委細を夫に語りて潔く夫の刃に伏し、は羅馬のルクレチアルとギルギニアの傳に殊ならず、沙翁此二傳を混じてタイタス、アンドロニクスが家の恥を除かんとて、強ひて辱められたる娘を手刃する事に脚色せり。自殺と云ひ、親に討たると云ひ、教義に乖きながらも、止むを得ざる場合に餘義なき行爲と判断する人多ければこそ、斯かる戯曲も行はるゝなれ。非道に逢ふ者、力餘りあらば禦ぐべし、力足らずんば遁るべきは知れ切つた事ながら、十一月一日號の本誌に頸大生が「自殺を否認するならば、人の危急に赴く事も否認せねばならぬ」と云へると等しく、死に様が自殺となるを懼るゝ者、争でか非道人に抗し身を全うし得んや。十一月初め奈良地方にて、墜道近き所に於て、強辱さるゝを免かれんとて、汽車の窓より飛び下り、萬死のうちに助かりし婦人あり、自殺を懼るゝ根性では成らぬ決心也。

擬自殺を禁ずる事ヤン教に限るに非ず。佛教の律藏亦之を禁ぜり。一は上帝の意に背くとし、一は何事も業報と諦めて忍べと云ふが異なるのみ。昔、妙賢女、好麗婦、徳輪王の玉女寶に比せらる。大迦葉を夫とし、與に一柱觀に居り、十二年内堅く妙業を修し、淨行嚴潔、始終踰えず、後ち夫出家して、妙賢亦無衣外道に入夥し、五百人に不斷輕辱され、受苦耐え難く、其師に告げしに、業報如何ともし難しとて、遂行泥印、今二百五十人以爲番次、稍や憂惱を減ず。後ち迦葉之に逢ひしに、其亂故の如くならず、推問して其既に汚されたるを知り、勸めて佛に歸せしめ、便ち證羅漢果、轉筆清淨、無生之女(ヤン教の娼婦得道して素女を復するに同じ)、時に末生怨王、父を弑して樂まず、大臣妙賢の極めて美なるを見て、逼て法衣を脱せしめ、嚴飾盛粧せしめて、惡王に進め、遂に凌辱せらる。斯くても此女自殺せず、數度多人の淫掠に任せしを、佛宿業瀧の如しとて、其因縁を説聞せし由(根本説一切有部必芻毘奈耶卷二、ジエフネル西藏傳語參取)。佛典にも多く斯かる事を教へし故に、佛法盛んなりし世には人心柔輒にて、僧尼に成り過ちを覆ふ者多く、淫風盛んにして自殺など少なかりしは、ヒュームが歐洲中古ヤン教全盛の世に、柔弱卑屈の事のみ多く、勇猛剛毅の風乏しかりしを論ぜるに同じ。幸ひに古學復興して、其教育と云ふもの、多くは希臘羅

馬に基き、スペンセルが云へるが如く、六日は希臘、日曜の一日だけヤンの教を受る事となりてより、性質も改まり、氣風も異り來たれる也。中世の淫風、今に上流に留り行はれ、實際一婦にして多夫なる者多き事、吾が平安時代に異ならず、因襲の久しきガラントリーとて之を稱揚す。近世著名の夫人モンタブ、スタール以下比々として然り、史家グロートの夫人の如き、此事無かりしを特筆せる程の事也。名操の爲め自殺を此輩に望むべきに非ず、下等社會の婦女が辱を見じとて、又辱を恥て自殺する者多きは、ターヂューの風俗罪論等に見えたり。凡て歐洲諸國の田舎に、自殺人を四辻に埋めて車馬に踏ませ、十字架を立つるを禁ずる等の事あり、故らに之を困らしめる爲めなど云ふを察するに、未開の世に痛く自殺者の靈を怖れし古俗の残れるらしき事多し。一にヤンの教理にのみ因らず、幾分か蒙昧時代の俗を襲ひて、自殺を忌むと見ゆ。

人毎に毛嫌ひと云ふ事あり、又毛好きとも云ふべき事あり。谷本博士は、乃木大將の名を聞くも厭な氣持がする由。ハーリー、ハーゾーは敗徳人也、但し予は彼を好む、汝試みに夫を斯く名づけよ、予は忽ち其夫を好まんと博士ジョンソンは言へり。予は知らぬ事ながら、予の知人は、從來、皆な谷本の名を聞くも厭な氣持すと語

る。其故を聞くに、先年豊太閣の傳を講ずるとして、伊藤博文公の一事一行を讀め、京都の老妓君尾に途中慇懃に挨拶したなど云ふ些事迄も稱揚せり。五經掃地とは斯人也と云へり。死せる乃木大將を貶して、生きたる東郷大將を揚ぐるなど、吾輩庸人には出來ぬ藝當也。又乃木大將が一言一行、古人の眞似せしと嘲る。ワレス、ピットソングルス等が言へる如く、世に殊の外斬新なる事物は、一も有るなし、非凡極まる人は知らず、通常人には古人の言行を眞似る外、琢磨の術無からん。且つ世に左迄斬新な事無くば、古人と期せずして合する言行も多かりしならん。「徒然草」の一章一句、是は何より採れり、是は誰より假れりと擧ぐる人を、塙檢校笑語して、兼好はそれ程博識なるまじと云へりとか。東郷大將の令詞(信號)の出處ならんとて、夥しく擡げ示されし英人に、予答へしは、西洋の例を搜ぐる迄もなし、梁の慧皎の「高僧傳」に、唐僧曾が孫權に強ゐられて、佛舍利を祈り出すに、請期七日、乃謂其屬曰、法之興廢在此一舉、今不至誠、後將何及と有るが、大將此様な物を讀みたりとも思はれず、人豈に事毎に温故して而して言行すべけんや。博士又乃木將軍の死後、其首相自殺の徵ありしを審言す。藤原兼實公の「玉葉」四二卷に、災禍起れる後、前年出たる星の凶星たりしを論じ、逆櫓松なる戯曲に、法印が占を問ふ者、姉が遊女となる身の上を

尋ぬと聞きて、成る程、龍鳥の卦に出て在りと言ふ一節あり、谷本流の邪推で言はく、博士の骨相判断も是等に眞似たるものか。謝在杭の言に、拾遺記に、善く馬を判つ者、馬死して其腦を破り視るに、色血の如き者は萬里、黄なる者は千里を行くと云へり、馬已に死して幾里行く馬と知れたりとも、何の効か有らんと云へり、要は骨相學の妙を誇らんとならば、死なぬうちに判断して、人々に告げ遣り、以て殃を未然に防がれたきものなり。

田舎住居不便にして、浮田博士の自殺論を読み得ざれど、如何なる事情あるにもせよ、自殺者を稱讃すると、キリスト教を奉ずる西洋人の評判が悪くなると論ぜられたりと聞く。一應尤もな事也。扱、是又傳聞ながら、博士は近年避妊術の必要を説かるゝとか、避妊術はキリスト教義に背かざるにや。紐育醫學校のガードナー教授、此事を論ぜる書、セコンジュカル、リレーシジョンシップス二萬部賣れたりとて、今夏知人より送り越しゝを見るに、歐米で避妊術に對する聲頗る喧しく、關係もなき蕃國の寺院にて、避妊防止の説教を出精すべしなど痛論しあり。自殺と避妊と、人を滅殺し評判を悪くするに於て、大した違ひありや否や（日本及日本人五九四號）。

紀州田邊灣の生物

南方熊楠

本篇は南方翁が、昭和四年五月廿三日に、宮内省より粘菌の標本を携へて、御召籠に出頭せよとの光榮ある御沙汰あり、爾來、翁は、天覽に供ふる標本の整理やら、御前講演の腹案を立つるやら、日夜、身心とも多忙を極めて居たが此の光榮の御沙汰ありと聞傳へ、諸方より問合せがあるので、舊稿を増訂して同月廿六日より、翌六月二日まで八日間、互り、大阪毎日新聞に連載した記事である。翁の洽聞博覽は、此の一篇に餘すなく發揮されて居るが、茲に借越ながら多少の脚註を加へ、敢て轉載する事とした（中山太郎謹）。

論語に樊遲稼を學ばんと乞ふ、子曰く、吾れ老農に如かずと。いくら農學書を讀んだ先生でも、土地に應じて作物を作る事は、その所の年寄百姓に及びも付かぬと云つたのだ。八年ほど前、田邊灣頭番所の鼻に、京大臨海研究所が立てられた時、縣

應より工事監督か何かに来た野口といふは、今時の役人に希に見る忠實な人で、數回弊宅を訪れ、この工事を營む者が、生物の學識なくては成らぬに、自分その心得なし。御氣附の事あらば、何分教へ下されたいと謂はれた。誠に用意周到と感心して、思ひ付き次第書付て差上ようと約したが、程なく蓄膿とかで罷職し、他縣へ從つた後迄も時々慰問された。今はどう成つたか知らぬ。其時、野口氏の爲に書付け置いた一小冊は、爾來、誰も尋ね來られぬゆゑ片付け置いた。荀子に問はずして告ぐるを傲といひ、一を問ひて二を告ぐるを嘖といふと有て、所詮、差出口は入らぬと思ふからだ。然るに今度側らずも、田邊灣へ生物學御研究に御臨幸と承はり、諸方より種々の問合せ數々到るゆゑ、彼の小冊に據りて多少述よう。

田邊灣で目星い處は、何と言つても神嶋だ。既に神嶋と名づく、此の嶋の神が灣内を鎮護すると信ぜられた事の久しきを知るべし。諸嶋中最も大きく、周り九町二つの小山東西に分れ立ち、岩平らかな地峽で繼がれ、大潮毎に地峽も海と成て一つの嶋を兩分する。東の山は樹木蒼鬱、古來斧で伐られず。西の山は明治十五年頃、一度禿にされたが、今は復た茂りをる。二つながら此の地方草木の自然分布の状態を観るに、最好の場所である。新莊村大字鳥の巢てふ小さい岬より、西の海上

三町許りに此嶋あり。又神樂嶋、加那伊嶋等、碁布して絶景なりと、紀伊續風土記にあり。嶋の磯邊に立て眺むれば、自から葛天氏以上の民と想ふ計り、靜かな無人の境である。大正四年五月五日、米國殖産興業局主任スキングル氏、拙宅來訪の次で、田中長七郎博士等と神嶋に遊び、その風景ギリシヤ海嶋に似たるものありと稱賛己ず、自ら寫眞して歸國後送られたのを爰に掲ぐ(中山曰。ス氏撮影の神嶋の寫眞挿入しあれど今は略す)。圖中に採取罐を佩びたは田中博士で、紋付き羽織が拙者だ。昔し宮女の怨みを制止するに用ひた、或る妙薬に就て長廣舌。それは近頃大儲けの妙薬と、手を口に加へて感じ居るのが縣會議員毛利清雅(中山曰。牟婁新報社長で翁の親友)。その妙薬を搜し居れるのが故湯川退軒てふ儒者の子だ。

神嶋の植物様々だが、就中、尤も名高いのは鬱珠だ。もと鬱珠と書いたらしく、鬱はムクロジで、共に數珠にするから謬り稱へたらしい。夏月薄紫の花咲き、刀豆に似て短かい莢を結ぶ。内に三四子あり、大きさは四五分、厚さは二分程、紫黒くて光澤あり、至つて硬し、豆科のパウヒニア屬の木質の藤で、喬木によぢ登り數丈に達し、終に其木を倒す。林中の幹から幹に伸び渡つた形も大蛇の如し。昔此の神嶋の林に入て、蛇といふを禁じ、一言でも蛇といへば、木が忽ち蛇に見えるると云つたは、本來、こ

の藤が蛇に似たからだらう(中山曰。こゝに彎珠林の寫眞あり今は略す)。

ギリシヤの古傳にテッサリア王フレギアースの娘コロニスが醫師アポロロと通じ妊娠中、イスクステム教者と親しみ、アポロロが監視に付け置いた鴉が之を告げた。アポロロ大に怒り其妹アルテミスしてコロニスを殺さしめ、火葬しかけた時、アポロロ焰の中より胎兒を取出し、半獸半人形の神ケイロンに授けて、醫道と獵法を習はす。是が醫聖アスクレーピオスで、よく死人を活すに因て、世に死人なくなり、地獄大不景氣、鬼共お茶をひく計りと訴へ出た。大神ゼウス世界が人間でギツシリ押詰るも困つたものと、忽ち霹靂してアスクレーピオスを殺し、アポロロその復仇に電鋒を造つた一眼鬼共を、塵殺にしたさうだ。そのアスクレーピオスの像は常に蛇木の棒を持つ、毎も以て毒蛇を制したので、印度から來たといふ。此の蛇木は學名パウヒニア、スカンデンスで、彎珠學名パウヒニア、ヤボニカと同屬だが、藤遙かに長大、捻れ廻つた狀一層蛇に酷似をる。

二

此の彎珠屬の學名をポーアニアといふ。十六世紀に瑞西ポーアン家の兄弟が

スパールンとジャンガ共に著名の植物學者だつた。此の屬の植物の葉は皆圓の如く(中山曰。明治四十四年十月撮影の彎珠と、その種子の寫眞挿入あるも今は略す)二つに分れ居り、随つて和名をハカマカヅラとも云ふ。ブルミエーは乃ちポーアン兄弟の名聲相齊しきを、此の葉の二つに等分せるに比べて、此の屬をポーアニアと名づけた。種類凡そ百五十、東西半球の熱帶地に最も多いが、ヒマラヤの寒地に生じ種子を食用さるゝもある。白井博士(中山曰。名は光太郎、東大名譽教授、翁の親友であつたが、翁に先じて物故した)來示に、小野蘭山は山城の八幡に彎珠を栽て久しく活き、花實を生じた例を擧げた由。(田邊近き山里の寒地にも生長し、多少結實した例もある。彎珠の産地は主として琉球諸嶋、それから九州の肥後など、紀州では此の神嶋の外に江住、見老津、同所海嶋、江田小嶋と、去年の御大典に贈位された畔田翠嶽の熊野物産初志にある由、白井博士示さる。江田小嶋には今もあり、又田邊から五里ほどの市江にもあれど實らず。白井博士説に、彎珠の字は、紀州産物考に初めて見るものゝ如し。小原良直の著から惟はると。言はゞ漸と百年内外の事だ。同博士より來書に、尤もワンジュてふ名は、寶曆庚辰原註。今より百六十九年前に戸田旭山が大阪に開きし物産會の記録文會錄に八幡の八幡岡志摩が出品

に鬼見愁、方言ワンジュとして枝葉の圖を出有之候、小生の所見にては、此の書の記載が最も古きかと存ぜられ候」と述べられた。その書に基づいたものが、今も此の邊に彎珠を鬼見愁といふ人あり。本草綱目を見るに、鬼見愁はムクロジの事で彎珠では無い。江住の彎珠は神嶋のより早く書籍に著はれ、白井博士來示に、紀州産物考に彎珠一名ハカマカヅラ、紀州牟婁郡江住の嶋にあり、他處に見ず、大蔓にして其莖の周圍二尺に及ぶ。長さ數丈にして喬木に蔓ふ云々。俗に此の實を帶て惡氣を避くと云ふと出づと。萬延元年齋藤拙堂の南遊志に、江住の地士城四郎衛門方で馳走された時、主人木ノ實を出して示す、名を彎珠といふ。ムクロジに比ぶるに稍小さし。言はく其嶋に採る所と。余以爲く、此れ念珠となすべし、彎珠恐らくは念珠の訛りか。嘗て聞く、物産家漢名鬼見愁なるものを以て之に當つと。未だ是非を知らず。其木灌木蔓生じ、暖地に非ずんば生ぜず、乃ち一掬を乞て旅裝中に置く」と記す。予若い頃和歌山生れで、本願寺の學僧兼詩人として有名な小山憲英師を、鉛山温泉に訪ふと、此の書が座右に在つた。予一寸見て爰に非暖地不生とあるは、曖昧な書き様だ。昔冷泉天皇の御時、宮中で天台法相の大宗論が有つた。法華經方便品の、若有聞法者無一不成佛の句を、若し法を聞く事有らん者は、一として

成佛せざる事なしと訓んだ。法相宗の學匠松室の仲算は、若し法を聞く者ありとも、無の一は成佛せずと、法相の意に訓み成した。その如く此の文も、亦暖地に非ざれば生ぜずとも、暖地の生ぜざるに非ずとも、全く反對の意味に執れにも讀める。そんな判然せぬ文を書いた拙堂は、上手でないと言つた。小山師暫らく案じて、ホンニ左様、是れを判然と書くには、則ちの一字を入れ、非暖地則不生とすべし。まだお若いのに大家の作をよく難ぜられた。天狗の生れ變りでも有らうと言はれた。彎珠の用途は、只今數珠に作るだけで、歐米で所謂シーピンス(海豆)を種々の裝飾や、耳環の鎮に使ふ如きに至らず。數珠商人に聞いたは、他所の産は種子の表裏共に、多少の凹凸ありて下品なり。神嶋の物のみ表裏に凹凸なく、滑かで上品だ。是は神嶋の彎珠は、神が惜むとて滅多に採らず、久しく木に付て十分成熟した後、腐葉土に埋もれて滑かになつたのだ。然るに近來急いで蚤く採るゝから、神嶋亦凹凸不齊な物多し(中山曰。こゝに嶋の鳥居前に居る南方翁の寫眞挿入しあり)。爰に出す圖は、件の彎珠を惜むと傳へられた、神嶋の神に詣る石段のかゝりの鳥居前に、果して大天狗と成つた鼻高の南方先生を、石に腰かけさせて、スキングル氏が寫眞し、歸國の土産としたものだ。此の邊に他には多からぬクスドイゲの木密

生じ、上の山に只今棟あふちの紫の花盛りに、見馴れぬ人には紫藤かと見られ、此の島特殊の景観を爲す。

三

類聚名物考に、熊野は暖地で毒蟲や瘴氣が多い。だから他所と異り、熊野詣りは冬これを爲すと言つた。然し夏も熊野詣りが盛んに行はれたは、盤海餘録に、熊野詣でと云ものは、虫垂絹を被り、杖笈杯にも目なれぬ形多く、古りぬる世の物と見ゆ。註に、熊野の道は木深く、蛭多ければ、それを除かん爲なりと云へりとある。才媛小大進が熊野より返る道中で、虫垂絹の透間から顔を見られて、思ひがけぬ筋の文を受取つた事が、續世繼に出づ、是は笠の周りにマントの様な物を垂れて、蛭のみならず種々の毒虫を避けたのだ。骨董集中山曰。山東京傳著に圖あり、そんな大層な物を拵へ能はぬ者は、切目王子のナギの葉を佩て、蛭を禦ぎ、此の神嶋の彎珠を持って、蝮蛇諸毒虫を卻けた。又熱病の節その煎汁を飲んで、神効ありと信じた。紀州産物考には、俗に此の實を帶て一切の惡氣を避る様見ゆ。彎珠と等しく豆科の灌木で、臺灣や琉球に生ずるシロツブてふ物も、時々田邊灣へ漂ひ來る。ムクロジの如

き球形の白い種子で、緒メにして佩ぶれば、邪鬼を避るといふ。外國でも彎珠と同屬のボウアニア、トメントサの芽や花で下痢をとめ、ボウアニア、ワリーリの種子を強壯又は健陽劑にするから、彎珠も實際多少の藥効はあるべし。

扱、英國の北部でも、熱地より漂着するシロツブ類似の豆を、數珠の親玉とし、聖母マリアの實と稱へ、佩て邪視を避け得ると信ず。邪視は佛經に出た語で、恰も英語のイヅル、アイに當る。經文に又毒眼など譯しあり。今年二月七十二で死んだ人類學者で有名畫家サー、チャールズ、リードの直話に、氏の生國愛蘭では、今も欣羨、貧慾、憎惡、嫉妬等の念ひを以て、人や畜や物品を見れば、見らるゝ者その害を受くと信じ、昔は邪視の力よく大建築を、焼くとさへ傳へたから、古い大寺の前に女が陰を露はせる像を立てたのがある。人有つて其建物を睨み詰んとするうち、ヨニーを見て忽ち視力の過半を其方へ減じ去らるべき仕組で、丁度落雷の際避柱よく電力を導き散じ、災ひ無からしむると同じと。ケオドル、ベント希臘の一島で百歳ほどの老婆に逢つた時、猶も齡を松に契りけん、ベントの眼力に害さるゝを懼れ、頻りに十字架を畫いて防いだと云ふ。餘り古からぬ一八四六年より一八七八年まで、羅馬法王だつたピウス九世は、邪視の聞え高く、その祝詞を受る者皆面を背け、唾吐い

て其害を防いだ。享保世話に「五つ指人さし指のその間に、親指はさんで煮豆おかしき」。是は邦俗が斯様にしてヨニーに象どり、人に示して其の好色家たるを諷るを詠んだのだ。然るに西洋では之を陰囊の間より男根の露はれたるに比し、邪視の嫌ひである者に遇はゞ示して其害を防ぐ。蓋し歐洲には中古妖巫を忌む風頗る盛んに、妖巫も女に相違なければ男の物を見て眼の毒が忽ち其方へ引去ると信じた遺風だと、リード氏予に語つた。去れば予が年中何の煩ひにも罹らぬは、夏冬素裸で振り通すから邪視を攘ひ通すによるのだらう。穢ない者や不具者は、誰も之を羨まぬゆゑ邪視を受けず。パートン説にカイロでは、十九世紀にも盛装した富家の婦人が、其子供の顔に泥を塗り、ポロを着せて連れ歩くを屢々見る。家に在ては錦衣玉食させ、外出毎に邪視を避るためわざと相好を損ずるのだ。印度ではナザル(眼害)とて、何の邪念も悪意もなく、又最も親切愛敬して、人や物を飽くまで視れば、視られた人物を害すといふ。その説に、例せば眇人が如何に寡慾清淡でも、眼二つもち綺麗な人を視れば、思はず知らず之を羨み、忽ち被害を其の人に加ふ。今又眼いか程美なりとも、その臉にカジャル(烟墨)を塗りて黒く汚し、又は眼邊に痣を拵へ、又白糸を釣下げて其貌を傷けたのを見ると、之を取とする念、知らず／＼之を羨

むの念と相剋して被害起らず、殊にカジャルで汚した眼は、眼力これが爲に減じ障えられて、他人の被害を及ぼすの嫌疑を免るとて、男女専ら之を用ゆ。エジプト婦人がコール粉を眼の縁に黒く塗るも、裝飾の爲とはいへ、實は此の理に基くならんと中山曰。此の項に南方翁と、大毎社長の本山彦一翁と撮影せる寫眞挿入しあり

四

印度で女子が成女期に達せる後は被害を受けず、被害を他人に加へ得ると信ず。父母が其兒の片言にいひ初め、或は歩み出すを見て満足せば、必ず其兒に被害を及ぼすとて、額の一側、又這ひ歩く内ならば、左の足底に烟墨(カジャル)を塗て之に備へる。不具や六指等の兒は被害を受けず。由て大吉として親に悦ばるとは餘程變なり。肥満した壯者は、瘦男の被害を避んため、左の臂に赤布を結び、頸に青糸を巻付などし、甚だしきは其の疑ひある場合に臨み、突然卒倒、ひきつける真似して、瘦男の執念を亂すに力む。文人は筆跡美事にして、人に羨まれん事を憂ひ、わざと一字を汚點して邪視を避く。但し巧みに仕組て汚點したと知れるやうでは、却つて人に譽めらるゝ、恐れあるゆゑ、一枚筆し了りて、最後のインキまだ乾かぬ内に、急に之

を卷て汚點は、實に不慮の過失に出たと見するを要す。又布帛の模様なども、一ヶ所をわざと不出來にして邪視を防ぐ。黄金と珠玉は誰も欲する所なれば、最も邪視を避るに功あり。小王(ラジア)輩の書翰に、金箔を散ぜるも飾りとせるに非ず、兒童が盜人にあひ命を失ふ迄も、珠玉を飾るも亦之が爲なり。凡ての海産物殊に珊瑚は、これ故に重んぜられ、之を買ふ能はざる貧民は、銀の楊枝や環を佩ぶ。支那でも三瓦の戒めとて、屋根の瓦を三枚葺き残して、鬼神に睨まれぬやう心懸けた。

支那には韓非子に、趙王が虎の眼を丸くするを惡むと、左右の侍臣が、平陽君の目は是よりもずつと惡むべし。虎の眼を見ても害なけれども、平陽君の目を丸くしたのを見れば、必ず死ぬと云ふたとある。貝子(たからがら)は今もトルコ、アラビア、ヌビア等諸邦で、廣く邪視を避るに用ひ、本邦でも子安貝と稱へ、産婦に握らせて難産を防ぐ。是は古ギリシヤ人が、之をアフロヂラ女神の印とせし如く、甚だヨニーに似た形ちゆゑ、最も人や鬼の邪視を避るに効ありとしたからだ。扱漢の朱仲が作つたてふ相見經に、一種の貝子を産婦に示すと、流産せしむとある。それから推すと、漢代すでに普通の貝子を以て、安産を助けたと分り、又それより古く支那にも邪視の迷信があつたを知る。晋の劉伯玉が妻、伯玉が洛水の女神の美を稱せるを恨んで水死

し、後ち七日夢に托して伯玉に語つたは、君本と神を願ふ。吾れ今神たるを得たりと。伯玉懼れて終身復た水を渡らなんだ。美人この津を渡る者は、みな衣を破り、粧ひを擾て敢て濟る。然せずんば風波暴發す。醜婦は裝飾すとも、神妬まざれば無難に渡り得る。婦人この妬婦津を渡るに、風浪起らざる者は、不器量ゆゑ水神怒らずと心得、みな自から形容を毀ちて、嗤笑を塞がざるなし。故に齊人の語に、好婦を求めんと欲せば、津口に立ち在れ、婦水傍に立て好醜自から彰はると云ふ。妬神の邪視を畏れて貌を損じ之を防いたのだ。酉陽雜俎又云ふ。百姓の間だ面に青き痣を戴く有て鯨の如し。舊く云ふ、婦人産褥で死んだ時は、夫の面に墨を點ずる、かくせざれば後妻に利あらずと。最も前妻の靈の邪視を怖れ防いたのだ。

古エヂプトに邪視の迷信があつた證據は、ホルス神の眼力よく大蛇アペプの首を斬落す。此の神又怒れば、其眼力叢林を震蕩す。諸神ラー神に啓す、汝の眼をして進んで汝の爲に、汝の惡言する者を破滅せしめよ、汝の眼ハートル形を現ずる時諸眼一も抗し得ずと。

日本紀に引いた一書に、猿田彦大神の眼、八咫の鏡の如く、八十萬神みな目勝て相問ふを得ず、天鈿女神のち其胸乳を露はし、裳帶を抑したれ、あざわらひてよく之と

問答したと見ゆ。明治十六年予共立學校寄宿舎に在つた時、童謡を聞くに「上野で山下芝では愛宕下、内の犬は椽の下、皆さんすくのは×の下」と。旨い哉言やで、いかな猿田彦の邪視もヨニ一の妙相にうち負たのだ。田村の草子には悪路王が利仁將軍に睨み負て、血の涙を流したとある。近松門左の「大職冠」に山上有風脾めば、一双の鴉、念力の眼に氣を打たれ落て死し、逆臣入鹿睨めば、南門の棟瓦、作り据たる赤銅の唐獅子、搖ぎ鎔けて湯となり、軒に滴り流れしは、恐ろしかりける眼力也と述べた。閑窓自語に裏辻公風少將姿艶に、男女老若悉く慕ひ、參内の日を計りて街に出で、待ち見る人も有たが、四位にも陸らず廿歳で死んだ。戀した人々の執念付たるにやと人言へりと出るは、詞こそ異れ、視害に中つて早世したと謂ふのだ。印度の禮法いかに壯健の女にあふも之を譽めず、反つて卿は一向瘦せて來た餘程悪いでないか氣の毒千萬杯いふが常式で、人の子供、邸園牛羊の美壯に繁榮するを見、其人の仕合せなどを知るも、一言たりとも譽めたが最期、卽座に妬念と視害の嫌疑を受けるを參考せよ。

米人リーランド説に、ロマニア地方で邪視、妖巫を避け、奇幸を迎ふるため、壁に蛇を畫く、尾を上、頭を下に、身體諸部混雜して結びをるを要す。又二三の蛇相纏ふ

た處を、編物にして戸口に掲ぐ。ベルシアで絨氈の紋條を、成るだけ込入て絡み合せた畫にするも邪氣を禦ぐ爲だと。本邦でも以前、出雲の龍蛇、其他蛇の畫を惡魔除として、多く門戸に貼つた。リ氏言はく、妖巫や邪視する人、かく纏れ絡んだ物を見ると、線の始めより終りまで、詳しく見届ける。其間に邪念、邪視力も大に弱り減するゆゑ、災難を起し得ず。疍持の小兒が六つかしくぐり掛つた處へ、迷宮様に道筋を引廻した圖や、纏れ解けぬ片糸を渡せば、一心不亂にほどきに掛かる内思ひ立ち居た小理屈を忘れ了る如しと。

尾佐竹猛氏中山曰。法博、大審院判事談に、伊豆の新島、利島、神津島、大島の泉津等では、正月廿四日を忌み、海難坊が來る日といひ、夜は門戸を閉ぢ、柵やトベラの枝を入口に挿し、上に箆を着せ、一切外を覗かず物音させず、外の見えぬやうにして夜明を待つ。傳説に昔泉津で代官暴戻なりしを、村民が殺し、利島に遁がれたが、上陸を許されず、神津島に上つたので、代官の靈が襲ひ來ると云へど、要領を得ずと。代官暗殺は事實で有らう。柵は刺トベラは臭氣で、惡靈を禦ぐは分るが、箆をなぜ用ゐるか。用捨箱に、或島國で暗夜に鬼が遊行するとて、戶外へ出ざる事あり。其夜さり難き事有ば、目籠を持って出づれば禍なしと、彼島人の話也と云つたは、新島邊の事

原因のやうに、訛傳したのであらう。

尾佐竹猛君は法曹第一の名あれど、畠がちがふと鎌が利かず、伊豆の新島で正月二十四日の日忌の夜、外を覗かず物音立てず、柊やトベラの枝に箆を被せて、入口にさすのが譯分らぬと書かれたが、氣の毒さに、上の如く長々と認めて「太陽」誌上で答へた。扱予久しく研究するに、痲癖の強き人や、更に進んだ或る狂人は、常人が看過する物どもを看過せず、仔細に留意して究めに掛つて息まず、圓形や三争形の圖に遇へば、その邊線の止まる點を求め、多數の物を見ては必らず之を算へ盡さんとする。東西とも古今鬼の形容動作を説くに、狂人に基づいて作つたと思はるゝ事多し。随つて狂人同様、砂や穀粒を多く示すと、鬼これを算へ了らねば氣が濟まず、算ふる内に弱つてしまふと信ぜられた。それに等しく、印度の貧民が邪視を禦ぐに、銀貨を佩び、又三角形や菱形に金箔を切り、草鞋（草履）に貼付て護符とする。又神も邪視に害せらるとて、一日に兩度遊女神前で邪視よけの式を行ふ事より、本邦で昔し浮世袋とて、娼家の暖簾に遊女自製の三角の袋を掛けた事は、南方隨筆に出した。

去れば本邦で邪視惡氣を避くといふ。惡氣は惡鬼の邪視から轉出したので、もと歐洲で聖母マリアの果、琉球でシロツブが邪鬼邪視を避くに言ふたと等しく、此

の豆形ち丸くて其の曲線を見盡す能はず、鬼も草臥れて、之を佩た人に邪視や惡氣を加へ能はぬて、ふ信念から××が大に持囃さるゝに至つたと考へる（中山曰。此の項に寫眞なし）

六

彎珠を惜むと傳へらるゝ神島の神は女神と云傳ふ。此の邊の諸祠に等しく石を神體とすと云ふと、例のモダン連それはアフリカのフイチシズムの類で二十世紀の日本に不恰好極まるなど言はんか、それこそ國體といふ處だが、そんな輩に國體論などは、勿體ないから姑らく説かず、耶蘇教のゴットといふ英語の基原たるスカンデナビア語でゴットは本と石を意味し、昔しの劍今の菜刀でなく、昔しの神が墮落した輩には、たゞの石に見えるのぢや。スピノサとか、レーニンとか、突外れた説者を輩出する猶太人が無神論など口にするを慶讃して、萬事古い物を廢毀するやう心懸る者に吞込み違ふのが大間違ひで、此の輩猶太外の民を煽動するには、舊物を全廢するが能事と説くと同時に、數千年前の猶太の古俗舊風を頑守すること驚くに堪へた者多く、猶太人が上帝の特恵を享る象徴にして、今も上古石器時代

の石器で、孩兒の包被を切り吉舌を斷つ。古風傳統を守りて自ら恃む所あるに非ずんば、争てか新案を斷行するの決心を出し得ん。明治四十二年爲政者、政府の收入を多くせんとて神社合併を命じ、金錢を神祇より重んじ、利得を懸て廢祠を勵行し大に民心頹廢の端を開けり(中山曰。是れより南方翁獨自の神社合祀反對意見が記しあるも、附録の前文を縮少したものとて、重復を避け六十一行を省略した)。神島の小祠も、其の時卒先して合祀されたもの、此邊の民は比較的淳樸で、神體の石を村社へ移せしのみ。縣吏など彼之れ言ふても、依違して應ぜず、今に小祠を立て續け居り、此の無人の小島に寄船する者、今も小錢を獻じて漁利好風を祈る。舟人の心は神の心にいふたに一理あらば、日本國民の心は都會に亡びて、此の田舎に存すると云ふべし。爰に掲ぐるキシウスゲは、學名カレキス、マツムラエ、松村教授が本縣東牟婁郡黒島で發見し、次に予この神島で十四五坪の地に、叢生せるを見出した。それが合祀後二年には、纔かに十二株に減じ有た。神社合祀がどれ程森林の荒廢を致したかを見るに足る(中山曰。此の項にキシウスゲの寫眞あり)

七

昔藩政の時代には、御留の物若干あり。例せば田邊藩の古屋爪谷の盆石、マンボウ魚、安藤蜜柑(予の現住宅と瀧川氏邸にのみ大なる物あり)の如き、藩主が時々之を江戸其他へ特別の贈品とし、其他一切之を境外へ出すを禁じた。古屋爪谷の盆石が近く海内第一の名を擅にするに、さしも博綜した石譜と知れたる雲根志に録せられず。安藤蜜柑が本邦橘類中洋人の嗜好に一番合ふに、唯今迄は著聞せざるは兩つ乍ら久しく御留物だつたからである。本と珍異の品々を藩主一人の專有とし、汎く衆庶をして其利を享けしめず、洵に吝じみた仕方だが、之を專有したい愛情心より、百方保護して絶滅せざらしめた功も亦大きい。日高郡の葦鹿島の如き、毎年秋分前後に葦鹿來たり群れ遊び、春分前後に北海へ去り、殺傷する者あれば嚴罰された。丁度桑港の金門園の小岩島に、海狗を遊ばせて置くが如し。その禁が維新後解かれて葦鹿は打殲され、見世物に成たり、安い油を搾られたりして跡を絶つた。日露役頃までは、偶々田邊の濱近く、一疋の葦鹿が遊ぎ來たつたが、いつともなく其れも絶えた。

南紀諸島の神林も、此の變遷は免れず、古座浦の黒島は大タニワタリの名所だつたが、今は濫伐して盡きたにか聞く。周參見浦の稻積島は樹木鬱陶、蚊蚋多く寫眞

をとる事も成らず、神島同様島の神樹を惜むとて草木を採らず、午後四時迄に引上る。古來大タニワタリを採る者、その一本の代りに杉苗一本を植ゑて歸る定法あつた。神社あれば、動植禁採の制札が口を利く處を、合祀されたから、濫採自在に成つた。神島亦之に違はず、その神祠合祀後は盜伐横行、落枝落葉を焚き盡したから、樹木自ら育つに由なく、明治四十四年度、新庄村に小學校とかを建てる費用の代りに下タ木を三百圓許りで入札賣却した。島に最も近き鳥の巢の岩本金兵衛てふ人、そんな事をされては風浪烈しき時、この大字は全滅の外なく、又此の島が丸禿になつたでは、灣内第一の魚附林を失ひ、漁業に大損害を加ふべしとて、抗議頻りなりと聞き、予毛利清雅氏と其の抗議を助け種々奔走した處、當時の村長橋本宇三郎、助役田上次郎吉二氏、随分譯の分つた人で、遂に村會に諮り、既に伐り去つたる木の代價を引去り、餘分を入札人へ返附し、尋で永く魚附保安林として今に至つたは、灣内の景觀にも漁業にも無上の賜物である。日本藥局方に載つたバクチの木は、昔田邊近方の名産だつた。その一本を加賀金澤へ移植して、今も花果ありといふ。故田中芳男々の遺弟で栗山昇平氏、手を盡して捜せしも田邊々で見當らず、宇井縫藏氏僅かに一本を賭しも合祀の爲に無くなつた。次に神島で多く發見せしも老木みな

枯れたから、已むを得ず其の花果を見るため、金澤へ旅行した。其後、予と伴て尋ね跡浦の地で、始めて一本花果あるを見出した。此の宇井氏の甥は拙妻の姪の夫で、宇井氏は小學教師であつた時から、縣下の動植物を博集し、顯花植物と羊齒類の目錄を大成し、又廿餘年の苦辛もて縣下の魚類を洩さず集めて、田中茂穂脇谷洋次郎兩博士の査定を経て故徳川頼倫侯の出資で、六年前紀州魚譜を出した。田中博士熊楠に語つたは、日本の地方魚譜として、是程完全なものは未曾有だと。先日の大毎紙に京大の誰か、田邊灣の魚類七百餘種を、某氏が集めてあつた。是程の大集彙をした人の名を逸するは、不念至極と思ひ居たが、實は一種五錢宛とかで、京大へ譲れと前年來交渉あり、鯛のテンブラ二疋バクについても五錢の世に、さりととはと呆れ居たが、宇井氏大阪へ移つて標本の置所に困るに附込み、今度、天覽に供するから、無上の光榮と説き込で、一切無條件で臨海研究所へ寄附させた由、同氏よりの來信に見える。多年貧乏續けた研究所が、所員年來刻苦して拵へた大集彙などなきは、十目の視る處で、それが忽然莫大數の標本瓶を張込んで、一夜作り魚類の大集彙を造つたは、全く宇井氏の年來刻苦を奪胎換骨だ。三月來永々續いた宣傳書に、宇井ともヌヒとも一言せぬは情けない。明治廿四年夏予フロリダの支那人牛肉店で

寄食する内、綠藻ピトフォラ、エドゴテア、ヴラトシユクオイデスを發見した。それより北の三州に有たが、此の半熱帯にもあるとは、誰も氣附かなんだから、予がネーチュールでの發表を見て、華府の國立博物館、辭を卑ふして求めて來つたので、海外知己ありと悦び、お安い御用と機嫌よく、和歌山市で發見したのと、標本二つ取捕へて贈り遣つたに對し、館長自ら鄭重なる謝狀を贈られた。僅か一種の藻すら斯くの如し、予は今度天覽の際、是れは宇井縫藏が多からぬ小學校教師の俸給を割き、廿餘年辛抱して集めたものと明白に、奏上稱讃し遣られん事を望む。大正十一年予上京したと聞き、故渡邊庄三郎教授(中山曰。理博で動物學者)自ら旅館に就て、田邊灣の動植物の拙話を筆記された。其時、本邦で大學とか博士とか言へば、背後に圓光でもさした如く畏れ入る。自適悠悠として世外に勉強する輩を、異端邪徒の如く輕侮冷遇する。之に反してそんな人物を外國から厚待し來たる所謂、漢恩は自ら淺く胡恩は深しで、此の鬱憂が爆發すると、匈奴に投じて漢使を折くだいた中行説のやうな者が輩出する筈と述べた處、同教授も惘然として洵に然り、僕は君が左様な行ひなき事を切望すると言はれた。例せば三年前の九月副島二郎とか云ふ人が、中亞タシユケントに到り、始めて日本人の顔を示した。然るにそれより二月前に、彼

地の勞農大學特に熊楠に一書を贈り、學識の交換を求め、其辭慇懃を極めた。些細な事は面倒ゆゑ、露國領の粘菌を總蒐して送り來たれ、日本の粘菌と對照比較して一論を綴り、標本共に送り遣らうと言つてやつたきり返辭が來たらぬ。久しく原首相の祕書を務めた亡友兒玉亮太郎氏曰く、邦人は米人ほど無作法な者は無い様に云ふ。然しよく觀察すると、頭を下げ、ヘイヨラ述べぬ許り、一言一行の稱すべきある者を尊敬して、弊衣の士に玉牀を譲り、飧食の君子に盛饌を供へ、以て自ら誇るやうな眞の大作法は、米人には珍らしからぬ事で、日本には絶無だ。誠に慙汗三斗以上を流すべしと。神島の森林が保留されてより殆んど廿年、村の吏民齊しく注意して、田村の謠曲をそのまゝ、枯枝一つ持出さしめず、紀州沿岸百二十里の間に、山頂より波際まで、樹木の生ひ茂れる事この島に若はなきに至つた。熊楠一人のみならず、灣内の住民、殊に漁家は、前現の二村長橋本氏、田上氏と、當初伐林に抗議した岩本氏に感謝せねばならぬ。初め花果無かつたバクチの木も夥しく成長して、花果多し。その木や葉は毒分を含むに、或る種の粘菌が之に生ずるは、或る原形質が毒分に抵抗する例として、大に攻究するを要す。蓋し 聖上萬機の御暇に御研學の好材料と察し奉る(中山曰。此の項寫眞なし)

パクチの木と並んで、神島の森の要分を爲すのガタブ、方言トウグス。是れは線香製造に必須の木だ。明治四十年予が發見した、殆んど唯一の綠色粘菌アルクリアグラウカは、此木に限つて生ず。上にも述べた通り、只今棟俗にいふセンダンの花盛りだ。本邦で古く此木に罪人を梟首した。平治物語に源義朝、鎌田政家の首を左の獄門の棟の木に懸けたとあり。西洋で靈木又印度の誇(ホリー、トリ)又ブライト、オプインチャ)と唱へて、翫賞さるゝに反し、餘り好遇されない。蓋し印度で此の木は巫(ハクチャ、アト)蠱や邪視を避ると信じ、支那でも屈原が五月五日に投身したるを、百姓競ふて食を以て祭つた。或年その幽公人に向ひ、御馳走は忝けないが、毎も蛟龍に盜まる。蛟龍が畏るゝ棟の葉を、五色の糸で包んで欲しいと言つたから、此の日皆その葉を佩びて惡氣を避くるさうだ。それから工夫して梟首の靈が暴れぬやう此の木で鎮めたらしい。鳥追女も旗本の目が懸ければ尤物たるを失はず、神島の棟花も時に取て紫藤に優りて見ゆる事も有りなん。

〔有難き御代にあふちの花盛り〕

雜と斯うだ。此の木は支那から來たものと云ふが、東牟婁郡七川村などの辟地に多きより考ふれば、在來の自生かも知れぬ。木芙蓉亦同様で、神島の濱に大きな老樹が有つたが、今や既に無し。蜀の孟後主成都城上偏く芙蓉を種ゆ。秋に至る毎に四十里錦繡の如く高下相照らす。因て錦城と名くと。田邊の事を古く錦城と呼んだは、何か芙蓉に縁ありや知らず。神風の伊勢生れ錦城館のお富とて、南方先生に名を立てた妖物の話も、今は昔となりぬ。是れは又後日に述べよう。それから此の灣外の或る荒磯に、潮波に浸りて蘇が生え居つた。陸から落ち來たつたのかと思ふたが、豫てグリーンランドに海生の蘇あり、英國の渚にも一種の蘇を生ずるを知り居たから、取り收めて蘇學の元締岡村周諦博士に贈ると、全體の三分一まで食鹽を含有する新種と分り、チクラネル、サルスギノサと命名されて、蘇學界をどよめかせた。是よりも仰天すべきは、神島に藻が蘇苔類に進化した實證に立つべき大珍品あつて、多年研究を累ね居るが、曾我祐成が言つた通り、貧は諸道の妨げ、今以て方付かぬ。

又珍な事は、此の島にタチバナ十一本自生して、現に實あり。中島濤三氏聞き集めたは、昔は近村に此の木多く自生し、一汎に之を伐り焚くを忌んだ。維新後禁戒

緩んで伐採し此の一本のみ残つたとの事。海草郡には今も自生多しと田中長三郎博士の直話だ。神代卷すでに橘樅の原と載ればいと古く有つたに違ひないが、桃や稻、麥等、本邦に自生なき物も、神代卷に出てゐるから、橘は本來自生か移入で野生したかどうかとも判らぬ。タイトゴメてふ景天科の小草は、廿九年前東牟婁郡勝浦の一小島で、予が始めて見た。四五年へて神島の海際に、少しあるのを見た。十二年ほど前に田邊南郊海近い沙地に生じて大に農作を妨げた。それが昨今丸で影を留めぬ。ヒュームは、歐洲の多くの國に櫻桃チエリが來つて忽ち野生し永く絶えず、然しルクルス始めアジアより之を將來つたのだ。國に興亡あり、暗世に明界に相交代するが、櫻桃一たび入つてギリシヤ、伊太利、スペインの林中に野生してより、永く絶ゆるなしとて、此の地球の幼稚なるを説いた。予の愚見には、生物も亦興亡あり、好餌に富んだ場所へ移り入て、一時大に盛えるも、肥料を吸盡して忽ち友喰ひを始め共倒れと成て跡を滅する事、此のタイトゴメ、如きあるを忘るべからず。恰も地中海に横行したノルマンヤや、南洋後印度に跋扈した日本人と異なる事なきさうだ。神島の森林が荒廢した時、キシウスゲは十二本しかなく、彎珠は殆んど全滅して居た。新舊村長等の厚意で保護廿年の今日と成て、全山殆んどキシウスゲで被は

れ彎珠は在來の東の山から、禿山だつた西山にまではたり居る。當初彎珠の衰へ凋んだ枝葉の間に、插圖の如き蛾、插圖省略が一疋花を求めて、飛廻るを見て、慘傷に堪えず、然し其蛾は後の證據に取て今も保存す。それより餘り落葉を採り焚て、蛾化すべき蛹の休息所を失ふたのも、彎珠が實らぬ一つの原由と考へ、嚴に落葉を採去るを禁じて、之を復興せしめたは、随分苦辛したものだ。其頃日本及日本人等へ書いたのを讀まれた者が、四月廿三日服部御用掛より來書に、神島に假御立寄場を設け、そこで彎珠保存の一件を申上げしとの事だつた。然るに其頃縣吏が村長に林下に道を開けと命じたと聞き、例の吹き替る月こそ漏れぬ板庇とくすみ荒せ不破の關守の歌を引き、生物學御研究に、新たに草を除き枝を切つては何の御興味も無からむ、人爲の市街をすら在來通りに御覽を望ませらるゝに、天然の觀察に人爲を加ふるを須ざるべしと申上げ、又島の山頂には時としてハカ子カ（タレグ）あり、膚を刺すと久しく痒い、故に山頂へ登臨は御無用と申せしそれを故意か不念か、新聞紙に大なるナツト多くて刺惱ますと書き、三變して或る學者共が神島にはチブスを傳ふる毒蛾モスキトある故、臨幸遊ばさずと惡評判を傳へた。その仕返しに、彼等利權者や官吏と結托して、巨萬の投資し、大に天然の地形を變革し、行幸を奇貨として

船賃自動車賃で儲け、扱聖蹟に別荘を構へたら、一生チブスに罹らぬなど廣告して其地を切り賣り、山分にせしめん魂膽をスツバぬきやりしに、大に青い顔で降参し掛けて居る。奉迎の張本連が此の通り故、村民も不謹慎の事少なからず、折角大金を費してデツチ揚げた御成道へ、血潮だらけの鰯や鱈子を乾し、追へば散じては又集り乾す、誠に盜賊が三度まで留置所を破るほど無勢なる吾等が、道路工事を監督した揚句、干鰯の片附けまで奔走せねばならぬは、ホ、ンホ、本に何たる因果ぞと、當職の役人の直話である。此頃汎太平洋會議へ出かけた博士で、郵船の珈琲が旨からぬとて小言だらゝ。珈琲飲みを上陸したと大評判の由。廿餘年刻苦した集彙を丸取りして、其の人名を一言しやらず、道普請を盛んにして得意を示すは、珈琲博士より以上の碩學といふべしだ。

田邊灣の生物に、いと珍しい物多いが、今之を述べるは、盜人の手引き同然ゆえ、一先づ之で筆を擱く。發端に書いた野口氏よりは、最近來書あり、土地に事を興すに先づ土地の識者に問ふは常識だ。それを殊の外賛られたは恐れ入る。而してそれが貴下の大人物たる所以と言はれて痛み入る。知らず、今日はそんな大人物とするほど學者の心がドン底に陥りあるか(完)。

神嶋、名勝天然記念物に指定さる

南方翁が、田邊灣内唯一の學術的勝地として天下に吹聴せる神嶋は、長くも聖上陛下の行幸を仰ぐに至りしが、越えて昭和九年十二月二十一日附を以て、調査主任南方熊楠、調査者毛利清雅、新庄村長阪本菊松、前村長田上次郎の四氏より史蹟名勝天然記念物指定を文部省に願出で、昭和十年十二月十六日に指定さるゝに至つたが、その調査報告書は概ね左の如きものである(中山太郎談)。

神 島

南方熊楠
毛利清雅

- 一、所在地 西牟婁郡新庄村字北島ノ巢三九七二番地
- 一、地 目 山林
- 一、地 積 土地臺帳ニ面積三町六畝二十一歩トアリ、昭和九年十一月田邊營林署ノ實測ニヨリ面積二、九九へくたゝるト分明ス

神島名勝天然記念物に指定さる

一、所有者 西牟婁郡新庄村
 一、管理者 西牟婁郡新庄村長
 一、由來現狀 本島ハ新庄村宇島ノ巢ノ西方約三町ノ海上ニアリテ、田邊灣内諸島中ノ頗ル大ナルモノ、其周圍約九町ト云フ。此ノ島主トシテ岩石ヨリ成リ、自ラ東西大小ノ二島ニ分レ、東島ニ多少ノ土壤ト砂濱アルモ、西島ハ殆ンド之ヲ缺キ、巖磯其ノ間ニ擴ガリテ二島ヲ聯ヌルモ、月ノ晦毎ニ潮水巖磯ヲ没シテ之ヲ兩斷ス。遠近ノ眺望佳絶ナレバ、建保二年(私註。皇紀一八七四年)内裏名所百首戀二十首ノ内順德天皇、僧正行意、家隆朝臣、知家朝臣ノ詠歌、何レモ紀伊國磯間浦現時田邊町ノ内ニ合セテ此ノ神島ヲ詠タリ。古來、紀州ノ沿海八十里ト稱セラレシ其ノ多クノ島岐中、樹木密生シテ波打チ際ニ接セルコトヨク此ノ島ニ及ブモノアラズ、東部ノ島頂ニ古來建御雷之男命ト武夷鳥命ヲ祀リ海上鎮護ノ靈祇トシテ本村ハ勿論、附近町村民ノ尊崇甚ダ厚ク、除夜ニ其ノ神龍身ヲ現ジテ海ヲ渡ル杯ト信ジタリ。明治四十二年本村村社ニ合祀シテ既ニ二十五年ヲ經ル今日ト雖モ、素朴ノ漁民參物ヲ絶タズ、供品腐ルニ及ブモ掠メ去ラズ、サレバ此ノ輩島内ノ一木一石ダモ犯サズ、專ラ畏敬シテ近日ニ及ベリ。

上述ノ如ク此ノ島名勝ヲ以テ古ク聞エタルガ上ニ、又特ニ絶好ノ彎珠ヲ産スルヲ以テ著ハル。是ハ豆科ノ大攀登植物ニテ、紀伊續風土記卷九四ニ「彎珠一名ハカマカヅラ、大蔓にして其の莖の周二尺に及ぶ、長さ數丈にして喬木上に蔓ふ、葉矢筈の如くにして互生す。花は未だ見ず、莢の形扁足に似て濶く、中に二黒子あり至つて堅し。形ち羅望子(ワニグチモダマ)に似て小さし、根は黑色大塊なり。俗に此の實を帶て惡氣を避くといふ」トアリ。琉球ト九州南部、四國南端ニモアレド、本州ニ在テハ、紀州ノミニ産シ、古來コノ神島ト西牟婁郡江住村二三所ト、和深村江田ノ双島トガ其ノ產地トシテ著ハル。就中、神島ノ物形チ最モ圓ク、肌細カニ光リ強ク、外面凹凸ナキヲ以テ念珠ヲ作ルニ最モ貴バル。古傳ニ神島ニ毒虫アルモ人ヲ害セズ、是レ島神ノ誓願ニヨル故ニ、夏期ニ熊野ニ詣ヅル者多ク島神ニ祈リ、彎珠一粒ヲ申シ受ケ之ヲ佩テ惡氣ト毒虫トヲ碎シトイフ(中略)。

過ル明治四十四年六七月ノ交、新庄村小學校舎改築費ニ充ムガタメ、此ノ舊神林ヲ賣却シテ擇伐ニ取掛ルト聞及ビ、南方熊楠、毛利清雅ノ兩氏ハ、當時ノ村長橋本宇三郎氏ニ説ク所アリ、橋本氏モ其ノ道理アルヲ認メ、村會ノ議決ヲ經テ賣却セル林木ヲ買戻シ專ラ神林ノ保護ニカム。其ノ時南方氏神林ニ入ツテ彎珠ノ

甚シク衰頹セルヲ見、其ノ再興ノ方策ヲ建テ當時ノ川上知事ニ申談ジテ、翌四十五年五月保安林ニ編入サル、ヲ得、同月十日入山禁止ヲ榜示シカメテ其ノ花ノ受精ヲ盛ムナラシムルコト十六七年ニシテ一旦絶滅ニ瀕セル彎珠ガ復々全盛スルノミナラズ、曾テ之ヲ産セザリシ西部小島亦彎珠ヲ生ズルニ至レリ。コノ再興ノ方案ハ五年前南方氏ガ御召艦長門ニ召サレシ節、聖聽ニ達シ奉リタリ。

又上述ノ如ク神島ノ神ハ近年マデ諸人ニ畏敬サレタルヲ以テ、神林ガ人爲ノ變改ヲ受ケシコト殆ンド絶無ナレバ、林中ノ生物思フ儘ニ發育ヲ遂ゲ得、又近地ニ絶滅シテ此地ニノミ殘存スルモノ多ク、往々今マデ此ノ島ノミニ見出サレテ全ク他ノ所ニ見エザルモノアリ。現時確ニ知レタル神島産顯花植物及ビ羊齒類總テ一百八十五種アリ、其ノ内りうきうからすうりハ、曾テ琉球特産ト聞エシガ、近年、宇井縫藏氏之ヲ神島ニ見出ス。はまやいとばな、おほまんれう、ばくちのき、たさきび、さしうすげ、くすどいげ、はまぼ、いぬがし、たちばな、やまごぼ等ハ、田邊附近ニ此ノ島以外ニ全ク見ズ、或ハ絶滅ニ瀕シ居リ、此ノ島ノてうじかづらハ、其ノ葉ノ長サ時ニ他ノ物ノ二倍ニ及ブアリ。南方氏ガ立テタル新菌屬しくろどんハ、此ノ島ト日高川郡川上村トノミニ産シ、新菌種すとろふありな、すぶさるさ

ハ、海水近ク生ズル稀有物ニテ、此ノ島ノミニ生ズ。

聖上陛下御研究ノ粘菌類ニアリテモあるくり、あかなめあな、あるくりあまけあさい、ぢあけあ、なかざわい、すてもうちず、ふすか、うゐゑら四品の中二種ハ此ノ崎ニ限リテ生ジ、二種ハ各此ノ島ノ外一地ニ限リテ生ズ。此ノ例ノ物此ノ他ニ少カラズ。

是等ノ事 聖聽ニ達セシニヤ、昭和四年六月一日、田邊灣行幸ノ節神島ニ御上陸直チニ南方氏ニ拜謁ヲ許サレ、舊神祠邊ニ御登臨、又神林ヲ雨中御採集アリ、後刻御召艦長門ニ南方氏召サレ、彎珠ニ關スル事等ニ就キ進講セシメ給ヒ、特ニ金二百圓ヲ新庄村へ御下賜アリ、村民等欣喜無限之ヲ基本トシテ醱集スル所アリ、當日御上陸後先ヅ御野立チ遊バサレタル地點ニ、行幸記念碑ヲ建テ、翌昭和五年六月一日友部知事ヲ始メ、多數ノ村民參列ノ上除幕式ヲ行ヘリ(以下略。白濱湯崎の諸文獻より)。

學界 偉人 南方熊楠 附錄終

(出文協承認) 5000部
あ290037號



著作
所有

昭和十八年一月十五日 初版印刷
昭和十八年一月廿五日 初版發行

發行所

合資
會社

富

山

房

東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一―二一七八番
振替口座東京五〇一―番

印刷者 (東京支店) 春山治部左衛門

東京市神田區神保町三丁目十番地

發行者

合資
會社 富山房

代表者

坂本守正

會員番號二二八五一〇

著作者

中山太郎

學
人

南方熊楠

定價貳圓八拾錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

佐藤隆房 著

宮澤賢治

A5判 二六〇頁 定價 四八〇
内言外装

輝く天才を擁し乍ら身郷土を離れず、眞摯なる農民の指導者として、其の全生命を捧げ盡した宮澤賢治の生涯を、盟友たる醫學博士佐藤隆房氏によつて熱情を以て物語られてゐる好著である。加ふるに五十面に及ぶアート版の寫眞及彩色版はその大部分が未發表の資料であり、此の多彩な才能、風貌を偲ばしむるに十分である。

ローゼンベルグ 著
加茂儀一 譯

レオナルド・ダ・ヴィンチ

A5判 三六四頁 定價 五八〇
内言外装

藝術の全般科學の全分野をその活動範圍とし、天才の偉業といふよりは神業に近い業績をとどめたレオナルド・ダ・ヴィンチのこれは詳傳である。今邦譯するに當り、詳しき註を施し解説を加へ、原著になき作品をも多數挿畫として増加し、参考文献目録、年譜、索引等をも添へて飽迄評傳としての完璧を期した。

＝ 行發房山富 ＝

289

Mi36

3

終